

那谷桃の木山古窯跡

発掘調査報告書

1991

石川県小松市教育委員会

那谷桃の木山古窯跡

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は、石川県小松市那谷町に所在した、那谷桃の木山古窯跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営公害防除特別土地改良事業一梯川流域地区一の実施に伴い石川県教育委員会が小松市教育委員会の協力を得て実施した緊急発掘調査報告書である。
3. 発掘調査は、昭和53年10月2日から11月22日にかけて行い、高橋 裕（石川県教育委員会文化財保護課）・小村 茂・宮下幸夫が担当し、調査補助員として田島正和があたった。また、考古地磁気測定は富山大学理学部教授広岡公夫氏に依頼した。
4. 出土品整理及び報告書作成は宮下・望月精司が担当し、下記各氏の協力を得た。

<遺物の分類・復元>	打田外喜代、伊藤節子、山口美子、金森和美、若山智賀子 成毛覚美
<遺物の実測・トレース>	宮田佐和子・江野直子
<遺物の拓本>	打田外喜代
<構造のトレース>	江野直子
5. 報告書の編集及び執筆
本書の編集は、小村指導のもと、宮下・望月が担当した。
執筆は、第1章・第2章・第3章を宮下が、第4章・第5章を望月が担当した。
6. 本書で示す方位は、すべて磁北である。尚、第1図には国土地理院発行25,000分の1地形図（昭和62年発行「小松」「動橋」）を使用した。
7. 調査の実施及び報告書作成にあたっては、以下の方々、機関。団体から御協力と御指導を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略 50音順）

内堀信雄 折戸靖幸 北野博司 木立雅朗 田嶋明人 福島正実 湯尻修平
石川県小松土地改良事務所 石川県立埋蔵文化財センター 小松市那谷町有志
小松市林町有志
8. 発掘調査費用は、石川県農林水産部耕地整備課が負担し、出土品整理・報告書刊行費は小松市教育委員会が負担した。

第1章 位置と環境

石川県の加賀地域は、白山大汝峰に源を発し、美川で日本海に注ぐ県内最大の河川である手取川により北加賀と南加賀に分けられる。いわゆる南加賀は、西に日本海、東に白山前山丘陵を形成する能美・江沼の両丘陵に挟まれた地域で、南に橋立台地と白山前山丘陵に挟まれた江沼盆地北に手取川と梯川に挟まれた能美平野が広がる。

この江沼盆地と能美平野の中間位置に柴山潟・今江潟・木場潟（現在、今江潟の全面と柴山潟の4割が干拓により消失）からなる加賀三湖とこれにより形成された潟埋積平野・三湖台地が広がり、東南を白山前山丘陵と境を接し、いたるところで小谷を形成している。加賀温泉郷の一つである栗津温泉は、林町より東南方にのびる谷の中程に位置している。この栗津温泉より那谷町をとおり山代温泉へ主要地方道が通っている。この道路の那谷町をすぎたあたりで、分校町へ抜ける県道が分岐している。本窯跡は、この分岐点よりやや分校よりに入った小谷の東斜面に位置していて、南加賀古窯跡群に含まれる窯跡である。

南加賀古窯跡群は、白山前山丘陵のうち、江沼盆地の東端をなす動橋川とその支流の那谷川及び加賀三湖の木場潟に注ぐ馬場川の開析により形成された、標高40~100mの低丘陵地帯に存在する須恵器・埴輪・土師器・壺類窯跡を総称したもので、県内最大の規模をもつ。

この窯跡群の出現は、ほぼ6世紀初頭頃と考えられ、二ツ梨東山4号窯跡がこの時期に相当すると思われ、当古窯跡群において発掘調査が実施されたものなかでは最も時代が古い。また、二ツ梨トノサマイケでは埴陶兼業窯が営まれ、三湖台に所在する古墳へ供給されている。6世紀代では、この二ツ梨地区と、南加賀古窯跡群の西端部を占める分校・松山地区及び那谷地区（本窯跡の西隣の金比羅山古窯跡・那谷川水系域）で操業がなされている。

以後、生産を拡大していくが、最も栄える時期は本窯跡の操業が行なわれた8世紀の前半頃で、窯場の拡大に伴って窯跡数が急増する。8世紀代では、二ツ梨地区で新たに5箇所で操業が開始される一方、この時期を最後に那谷川水系域での窯業生産が終了し、後半には収束・統合の傾向を見せる。

このことは9世紀には顕著に現われ、生産規模は縮小していく。窯跡も、箱宮地区で新たに操業が開始する以外は、戸津・二ツ梨地区において存続しているのみである。しかし、戸津地区を中心として、9世紀の終わり頃に生産が再興され、生産量は爆発的に増加し、再び盛期を迎える。また、各地区で瓦の同時焼成が見られる。当古窯跡群での須恵器生産は、10世紀を最後に見られなくなる。

壺器系中世陶器（加賀古窯製品一加賀古陶）の生産は、須恵器生産の終了から現在までのところ、二世紀近く後の12世紀末に開始されたと考えられる。二ツ梨オクダニ窯で操業が開始され、その後生産地点が分散したと考えられる。更に後の那谷ダイテンノウダニ窯の時期に至り拡大的な展開を迎える、大甕の量産化が認められる。次の時期は、生産が安定した展開をみせていて、那谷カミヤ窯と湯上ユノカミダニ窯がこれにあたる。後、生産がユノカミダニ窯に集約され、西荒谷カマンダニ窯に移転し、14世紀後半頃かおそらく15世紀の前半頃に操業が停止すると現在は考えられる。

第1図 南加賀古墳群分布図 S=125,000

褐色—古代 灰色—中世



No.	窓跡群名	備考	No.	窓跡群名	備考
1	分校	1972 大聖寺高校郷土研究部調査	24	林タカヤマ	
2	松山比羅山	1982.83.84 県立埋蔵文化財センター調査(1~11号窓)	25	戸津トヅ	
3	那谷桟の木山	1978 小松市教委調査(1~2号窓)			
4	二ツ梨カセイア	1969 大聖寺高校郷土研究部調査(5号窓)	26	戸津ワクダニ	
5	箱宮ドウガヤチ	1986 小松市教委調査(1号窓)	27	戸津シヨウガダンダニ	
6	矢田野ナガオヤマ	1988 小松市教委調査(所原部分)	28	上荒屋ジヤンモイダニ	
7	三ツ梨ワキガマ	1984 小松市教委調査(1~5号窓)	29	上荒屋ヨウヤマ	1986 小松市教委調査(3号窓)
8	二ツ梨東山		30	上荒屋ホウジヤマ	瓦陶業葉(1号窓)
9	二ツ梨東横川		31	上荒屋ニカヤマ	
10	二ツ梨ガマダニ		32	馬場ニカヤマ	
11	二ツ梨東山		33	那谷コテンノウダニ	1969 北陸大谷高等学校地歴クラブ調査
12	二ツ梨サンマダニヤマ		34	那谷ダイテンノウダニ	1973 小松市教委調査(1~2号窓)
13	二ツ梨トウダヤマ	1981 小松市教委調査(1号窓)	35	那谷カミヤンダニ	1977 小松市教委調査
14	二ツ梨トウダヤマ	1983 小松市教委調査(1~3号窓)	36	那谷カナクソダニ	1969 北陸大谷高等学校地歴クラブ調査(1号窓)
15	二ツ梨トサマイケ	1970 小松市教委調査(1~2号窓)	37	二ツ製オクダニ	1969 大聖寺高校郷土研究部調査(1号窓)
16	二ツ梨トムラウシヤマ	1970 小松市教委調査(8~9号窓)	38	箱宮ドウガヤチ	1981 小松市教委調査(13号窓)
17	二ツ梨豆岡山	戸津2号窓 北陸大谷高等学校地歴クラブ調査	39	戸津トヅ	本報告書(灰原部分)
18	二ツ梨マメオヤマカイヤ	1982~86 小松市教委調査(1~4号窓)	40	上荒屋ハカンダニ	
19	二ツ梨一貫山	1986~89 県保存協会調査(1~2号窓)	41	清音谷カマシダニ	
20	戸津オオタニ		42	西荒屋カマシダニ	
21	戸津アナヤマ				
22	戸津六字丘				
23	林オオカミダニ				

注) 窓跡群名については、原則として地名の後に字名等をカタカナで付して表記した。ただし、現在までに発掘調査等が実施されたものについては既知の名称を用いた。この名称については、小松高等学校地歴部・近刊 強氏の著述に基づくものである。

第2章 調査至る経緯と調査概要

第1節 調査に至る経緯

桃の木山古窯跡の調査は、県営公害防除特別改良事業－梯川流域－の実施に伴う緊急発掘調査によるものである。

昭和52年度に小松市梯川流域のカドミウム汚染田の土地改良事業が実施されることになり、水田客土用の土砂採取場に、小松市那谷町地内通称桃の木山が選定された。この計画決定を知った小松市教育委員会社会教育課（当時）は、石川県教育委員会文化財保護課（当時）に対し「土砂採取予定地内に古窯跡が所在する」と連絡した。文化財保護課では直ちに現地確認を行い、灰原部分から多量の須恵器片が採取され、当該地に奈良時代の古窯跡が存在することを確認した。それをもって文化財保護課は、石川県農林水産部耕地整備課との間でその取り扱いについて協議を行なった。

その結果、当該古窯跡部分は昭和53年度に採取する計画で、昭和52年度は、当該地の北に続く斜面を採取する計画であったため、北側及び東側について分布・試掘調査を実施し、他の埋蔵文化財の所在の有無を調査することになった。

昭和52年9月19日から9月23日まで、延べ5日間にわたりトレント法により試掘調査を実施したが、調査地区には灰原等古窯跡の存在を暗示するような所見は得られず、当該土砂採取予定地内には、古窯跡1基だけが所在するとの結論に達した。その結果、再度、耕地整備課との間で協議を行ない、昭和53年度に緊急調査を実施し、記録保存を図ることで双方が合意した。

昭和53年度に入り、文化財保護課と耕地整備課では、土砂採取の進行状況に合わせ協議を行い、発掘調査は小松市教育委員会の協力のもと秋に行なうことになった。

第2節 調査概要

発掘調査は昭和53年10月2日より開始した。まず、ブドウ棚の撤去を行い、後、現況の地形図を作成。トレントを設定し、窯体の確認作業を行なう。6日までに焚口部の壁を検出し、ここより窯尻方に追求する。窯はくりぬきと判明したが上部の土量が多く、壁残存高までの地山の排土に11月1日までかかる。2日より前部の掘り下げを開始し、並行して床面の追求を行なう。6日に焚口部に立ったままの炭化木材を検出した。また、清掃を行い、7日には写真撮影、平面図・断面図の実測、後、床面遺物の取り上げを行なった。8日に焚口部から前部にかけて掘り下げた結果、焚口部床面下約40cmに床面を検出した。10日には前部に土坑状遺構を検出、この掘り下げを行なう。13日に富山大学広岡教授による考古地磁気測定資料採取が行なわれた。16日に下の床面の追求を行い、前部に4個のピットとこれより古い排水溝を検出した。18日に写真撮影・図取りを行い、20日には広岡教授による2回目の考古地磁気測定資料採取が行なわれた。

窯体の追求と並行して、灰原及び周辺の調査を行なった。その結果、窯体の左方（南側）に調査時性格不明でカマド状遺構とした遺構が検出された。また、窯体の左やや下方に土坑が2



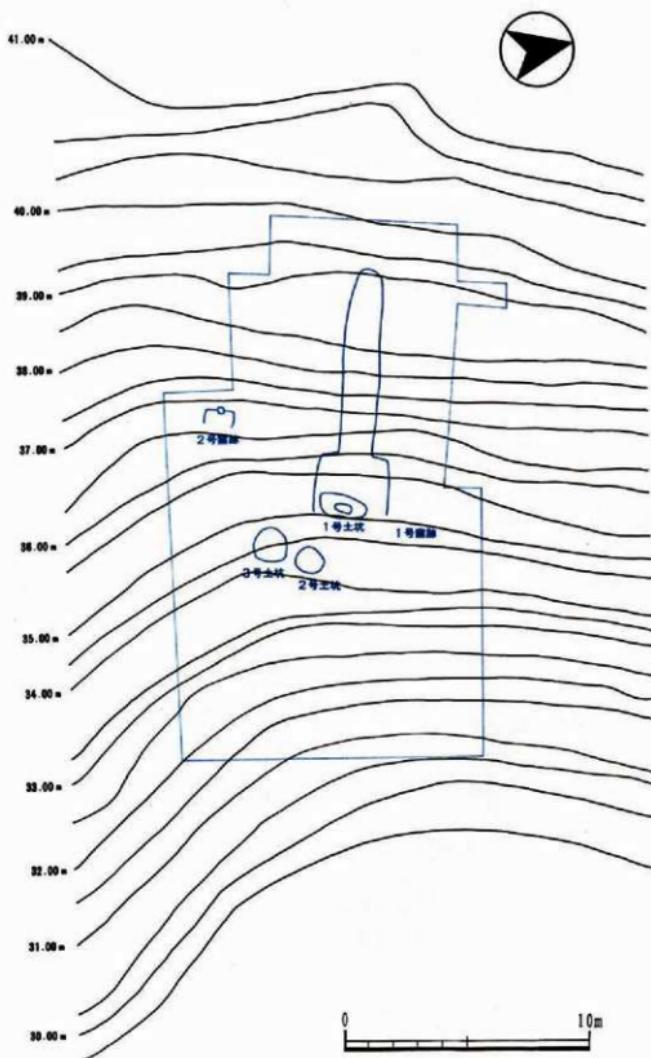
第2図 桃の木山周辺地形図 ($S = 1/2,500$)

基検出された。

以上の調査と写真撮影・図取りを終え、11月22日に器材の撤収を行い発掘調査を完了した。

尚、昭和52年度の試掘調査時に本窯跡の南東斜面において1個の須恵器及び焼土が若干検出されたので、昭和54年度に、石川県教育委員会の依頼で小松市教育委員会が補足の分布調査を行なった。しかし、新たな遺構・遺物の検出がなく、おそらく耕作時の移動と考えられた。後の出土品整理で、この破片と窯跡灰原出土の破片が接合されたことによってもうなづけるのはなかろうか。

また、ここで不祥事を詫びなければならない。それは、調査が昭和53年と古く、その間小松



青色一調査区域及び造水記載図
黒色一調査前地形測量図

第3図 桃の木山古窯跡調査区配置図 (S=1/200)

市教育委員会の調査事務局の場所が数度移動し、また、整理を行なう場所も同じく二転三転としたため、調査記録のうち最も大切な図面類が紛失してしまい、本報告は、概要報告書の図面等を再掲載しなければならなかった。窯体断面図や灰原の土層図等はそのような理由で載せられなかった。以後の記述も、日誌・調査員の野帳及び概要報告書をもとにしたものである。

第3章 遺構

発掘調査で検出された遺構は、須恵器窯跡1基（桃の木山1号窯）、土師器窯跡1基（同2号窯）と3基の土坑（同1～3号土坑）であった（第3図）。

遺構は、ブドウ畠としての開墾・耕作の影響をほとんど受けていなく、灰原が若干削平されていたにすぎなかった。以下、その遺構の構造、規模等の概略を述べる。

1. 1号窯

窯体は、等高線に直交して構築されていて、主軸方位はN-75°-Wを測る。窯尻で、現地表より窯底まで深さ2.8mを計り、焚口よりくりぬいて構築した地下式の無階無段登窯である。窯体は、大きく分けて2回の改造が認められ、これをⅠ次床・Ⅱ次床（最終床）と呼称した。

Ⅰ次床（第4図）は、全長8.2m、幅は焚口部で1.25m、燃焼部で1.35m、焼成部最大で1.6mを測る。床面の傾斜は、焚口より燃焼部にかけてやや下降していく、後、上昇に転じ焼成部では約20度であった。焚口右側より前庭部右側にかけては、幅20～25cm、深さ15cmの排水溝が掘られている。本床は、一部改造及び部分的に修復されていて、その時点で排水溝は埋められている。

Ⅱ次床（第5図）は、Ⅰ次床を崩れた天井や側壁で埋めてかさあげし、地山の黄褐色粘質土を貼って床としている。全長7.5mで床面残存部までは主軸上で8.0mを測る。幅は、焚口部で1.35m、燃焼部で1.5m、焼成部最大で1.6mを測る。Ⅰ次床より焚口部を50cm奥に設け、やや幅を広げている。床面の傾斜は、焚口より燃焼部にかけてやはりやや下降していく、後、焼成部下方で10～15度、上方で約20度であった。

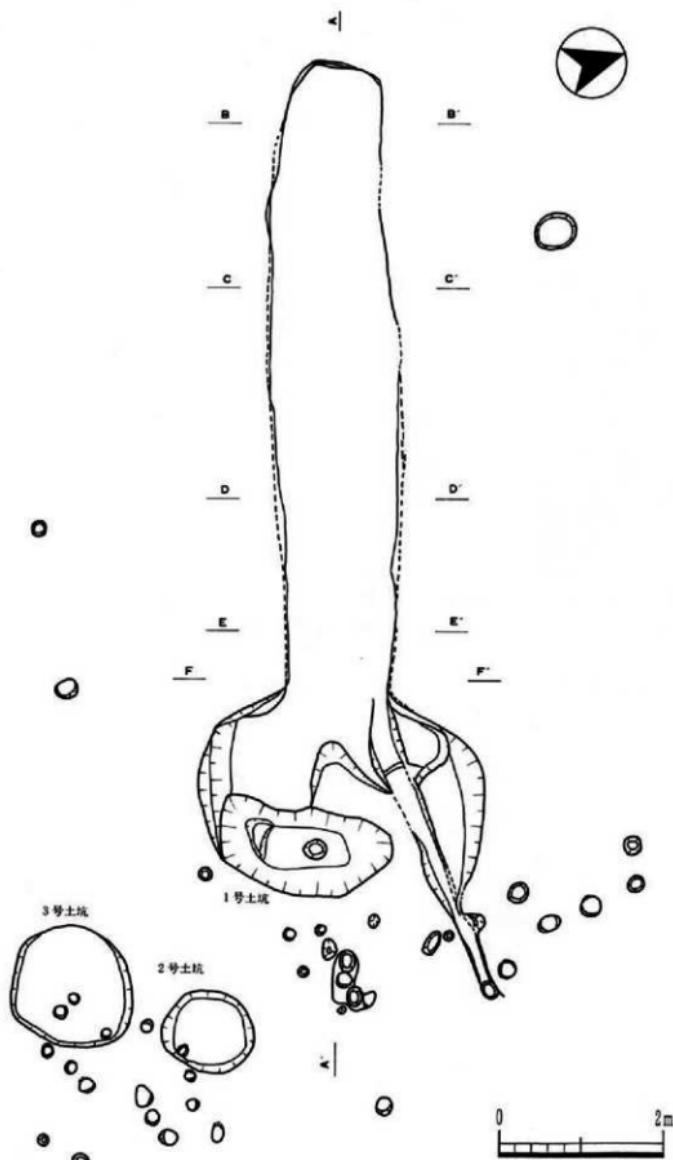
焚口部には、炭化木材が6本遺存していて、3本は立ったままの状態であった。これらは、最終焼成時にとり残されたものと思われ、ほぼ原位置と考えられる。太さは、10～15cm、長さ80～90cmであった。

前庭部には、Ⅰ次床の溝や土坑を埋めて、その後に径15～20cmのピット4個が穿たれていた。これにより、前庭部から焚口にかけて、覆屋があったと思われる。

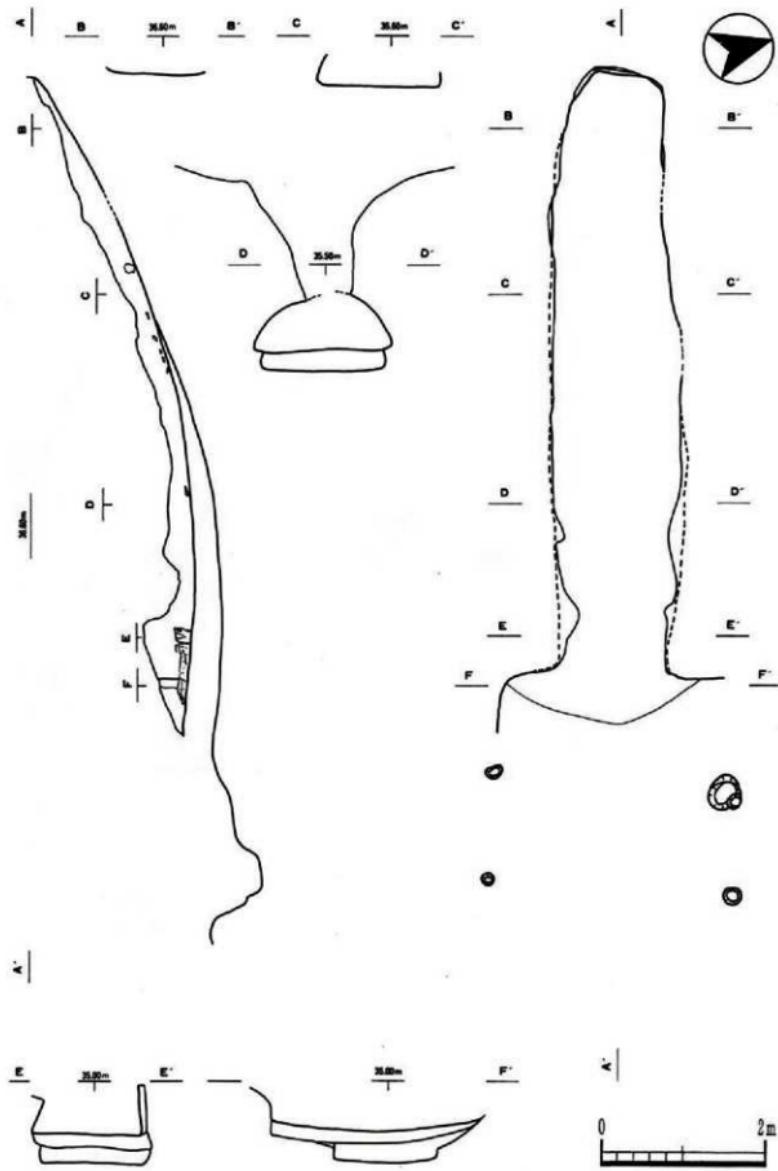
2. 2号窯（第6図）

1号窯の南側に並行して築かれていた。平面形は、南北105～110cm、東西60～70cmの長方形プランを呈している。西壁部分で地山を20～25cm掘り下げて、床面は水平であった。壁、床面とも焼けていて、東部分が若干削られていたが遺存度は良好であった。西壁のほぼ中央に径23cmのロート状のピットが穿たれていたが、このピットの中は焼けていなかった。

本窯の床面中央より塗彩土師器片が若干検出された。



第4図 1号窓跡I次床及び1~3号土坑実測図 (S=1/60)



第5図 1号廟跡II次床及び断面図 (S-1/60)

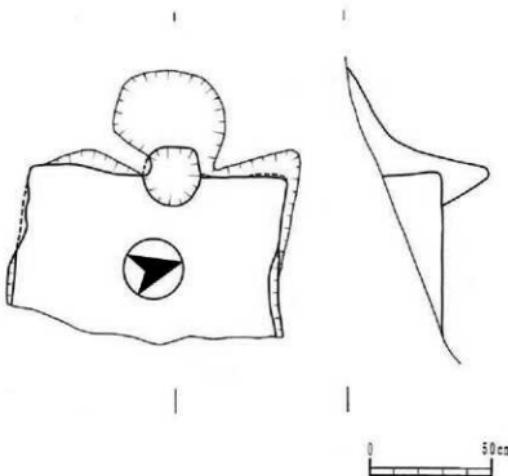
3. 1～3号土坑（第4図）

1号土坑は、I次床の前庭部に検出されたもので、 $2.1 \times 1.1\text{m}$ のやや長方形プランを呈し、深さ90cmを測る。おそらく、I次床の残灰処理等のためのものと考えられる。

2号土坑は、1号土坑の南東に検出されたもので、 $1.2 \times 1.0\text{m}$ の楕円形プランを呈し、壁の一部が焼けていたので、土器窯の可能性があるかもしれない。

3号土坑は、2号土坑の横に検出されたもので、径1.5mの略円形プランを呈している。

なお、前庭部及び窓体の周囲には、径15～20cm位のピットが多数認められたが、柱穴としてまとまったものは、前述の覆屋のもの以外は検出されなかった。



第6図 2号窯跡実測図 (S=1/20)

4. 考古地磁気

考古地磁気は、富山大学理学部教授廣岡公夫氏に測定を依頼した。その測定結果は、理学部地球科学教室の廣岡公夫・岡田宗・吉村勝之・井口滋存の各氏連名で報告を頂いた。

それによれば、桃の木山1号窯I次床面はA.D.850±70年、同焚口部はA.D.650±80年、II次床面はA.D.840±40年、2号窯跡はA.D.570±50年又はA.D.800±25800年であった。

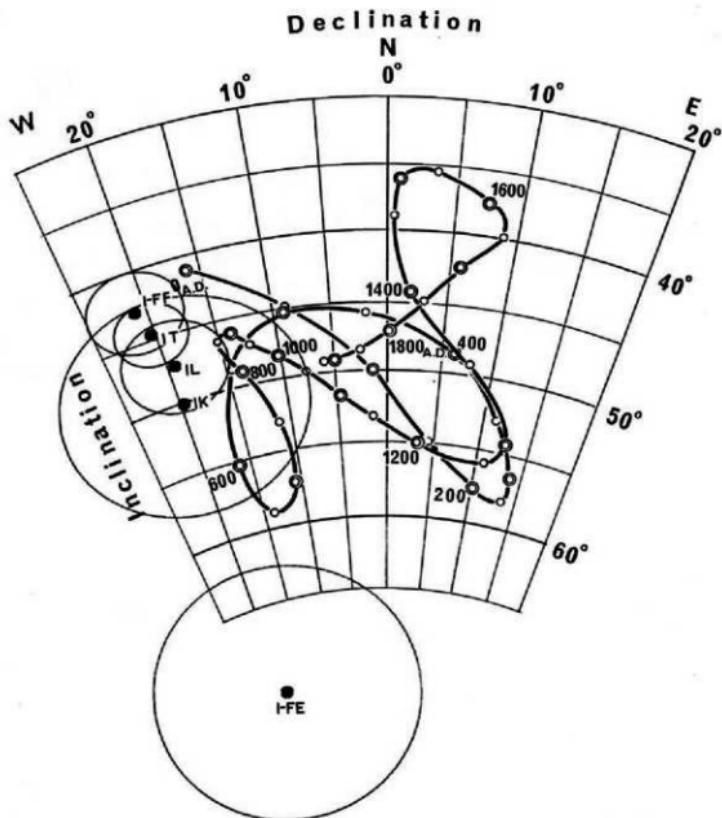
以下、そのデーターを示す。

1号窯 I次床面 (1-F F)	試料数	15	試料採集年月日	1978.11.13
1号窯 I次焚口 (1-F E)	タ	11	タ	タ
1号窯 II次床面 (1-L)	タ	14	タ	タ
2号窯 (1-K)	タ	11	タ	タ

偏角補正值 ($^{\circ}$ W) は全て4.43

測定結果

	試料個数(N)	平均偏角(°E)	平均伏角(°)	$\alpha_{95\%}(^{\circ})$	K	磁化強度(emu/g)
1-FF	13	-20.75	42.93	2.98	194.2	4.85E-4
1-FE	10	-19.71	71.13	8.56	32.8	3.63E-4
1L	9	-19.12	47.50	3.31	242.8	5.27E-4
1号座TOTAL(1T)	22	-20.12	44.80	2.28	186.3	—
1K	8	-19.50	50.25	7.74	52.2	2.22E-4



第4章 遺物

当遺跡において出土した遺物は、大半が1号窯跡とそれに伴う灰原から出土した須恵器で、1号窯跡Ⅰ次床から289点、Ⅱ次床から588点、窯体覆土から178点、前部から870点、灰原から4518点、周辺の土坑から180点の破片数を数える。また、僅かではあるが、2号窯跡（土師器窯）等から土師器が10点出土している。以下に須恵器と土師器に分けて、各出土ごとに遺物の説明を加え、編年的な検討を加えてみようと思う。

第1節 須恵器

各出土の遺物を個々に説明する前に、出土量が多く一器種内で細分できる供膳器などの器種について、あらかじめ分類を試み、その分類基準を示しておきたいと思う。

(1) 器種分類

坏蓋

当遺跡において出土した坏蓋は、口縁部に返りをもつものと折り返しのものに大別される。返りをもつものは、破片で2個体出土しているだけで、分類するまでには至らない。

折り返し口縁のものは、回転ヘラ切り後回転ヘラ削りを施し、偏平鉗を貼付する点では共通しているが、器形から山笠状に開き、高いタイプ（A）と天井部に平坦部をもつ、やや偏平なタイプ（B）とに分けられる。Bタイプは平坦部に広くヘラ削りを施すものが多く、Aタイプのヘラ削りはやや幅狭に施される。また、口縁端部の形態から、口縁部折り返しが長く、薄手のもの（1）、折り返しが長いが、厚手のもの（2）、口縁端部外面が凹線状に窪むもの（3）、折り返しが短く、薄手のもの（4）、短く厚手のもの（5）の5つのタイプが存在する。そして、さらに、口径から14~18cmのもの（I）と、20cm以上のもの（II）とに分類できる。

有台坏

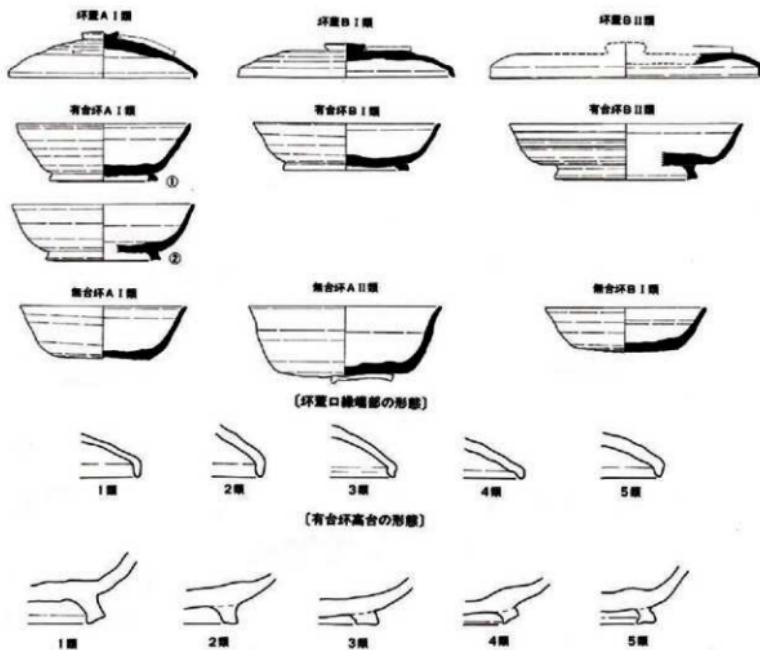
成形技法は底部を回転ヘラ切り後軽いナデまたは未調整する点で共通しているが、坏身の深さにより径高指数30以上の深身のタイプ（A）と径高指数30未満のやや浅身のタイプ（B）に分けられ、高台の形態により、足高のもの（1）、「ハ」の字に踏ん張る形態で、置付き部が平坦に接地するもの（2）、2の形態で、低いもの（3）、2の形態で、内側接地するもの（4）、高台部付け根がすぼまり、置付き部が窪むもの（5）とに区分できる。そして、口径から14~16cmのもの（I）と19cmのもの（II）に分けられる。

無台坏

調整技法は手持ちヘラ削りものや回転ヘラ削りするものも一部見られるが、他は底部回転ヘラ切り後軽いナデか未調整のままにする点ではほぼ共通している。しかし、坏身の深さにより径高指数30以上の深身のタイプ（A）と径高指数30以下のもの（B）とに分けられ、器形からさらに、底部が厚手で、底部から体部へ丸く立ち上がる（1）と底部がやや薄手で、平底を呈する（2）とに細分できる。そして、口径から12~14cmのもの（I）と15cm台のもの（II）に分けられる。

鉢

底部から丸味をもって立ち上がり、頸部で「く」の字に屈曲して口縁部に至る器形や櫛描き波状文を施すという特殊なものではあるが、ここでは鉢として扱った。良く似たもので、壺や



第7図 壺類形態分類図

壺として扱っているものもある。口径は14~15cmを測る。そして、波状文の施文をもち、底部がやや平底風となるもの（A）と施文しないものやや丸底風の底部を呈するもの（B）とに分けられる。

すり鉢（鎌原遺跡報告書での鉢F類に相当）

ここでは底部を欠損しているものの、すり鉢と推定される破片も含めて、分類をおこなった。体部外面の整形方法により、縦位の刷毛目調整後ヨコナデを施すもの（A）とヨコナデ調整のみ施すもの（B）とに分けられ、Bの中で描書き波状文を施すもの（B₁）とそうでないもの（B₂）とに細分される。

短頸壺

肩部の器形によりA~Cの3つに分類できる。Aは肩部上位に最大径をもち、肩の張る器形で、ヨコナデ調整を施す。底部には高台が付される可能性が大きい。Bは肩部の丸い器形で、外面に平行叩きとカキ目調整、内面に同心円叩きを施す。底部は丸底になると思われる。Cは小型品で、上から押し潰したような器形を呈する。

壺

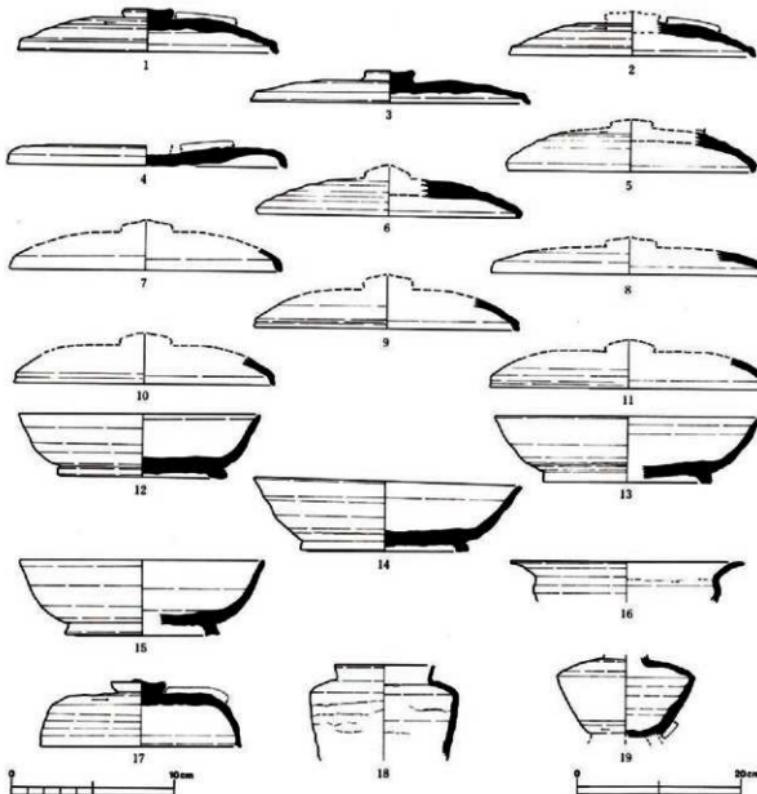
口径により35cm程度の大型品（A）、20~25cmの中型品（B）、12~17cmの小型品（C）に分けられる。Aは口縁部が長く外反し、端面が外傾する器形のもので、口頸部に縦位刷毛目調

整後櫛描き波状文を施し、胴部に外面平行線文叩きと内面同心円文叩きを施すもの。篠原遺跡の甕Aに相当する。Bは口縁部がやや短めで、水平の口縁部端面をもつ器形で、丸く肩の張る胴部をもつ。調整は口縁部ナデのみで、胴部はAとほぼ同様だが、外面の一部にカキ目調整を施すもの。篠原遺跡の甕Bに相当する。Cは口縁部が短く外反し、端面が外傾または水平となる器形のもので、Bと同じような胴部器形をもつ。調整はBとほぼ同様だが、平行線文叩きを消すくらいカキ目調整が顕著に施される。

以上、分類してきたが、他に高坏、瓶、長頸瓶（篠原遺跡の瓶A類に相当）、広口瓶（篠原遺跡の壺J類に相当）、淨瓶（篠原遺跡の瓶F類に相当）、横瓶の器種も確認されている。

（2）1号窯跡I次床出土須恵器（第8図、写真図版5～8）

I次床出土の須恵器には、坏蓋・有台坏・無台坏・鉢などの供器器、長頸瓶・横瓶・短頸壺の壺瓶類及び大小の中壺類などの貯蔵器が確認できる。個体数の比率は破片数では坏蓋74点、坏類22点（うち有台坏21点）、壺瓶類71点（うち長頸瓶14点、横瓶46点、短頸壺1点）、坏12



第8図 1号窯跡I次床出土遺物（1～17はS=1/3、18・19はS=1/6）

1点を数え、口縁部計測法によれば、坏蓋79%、坏6.6%、鉢9.4%、短頸壺5%の比率を求めることができる。

1～11は口縁部折り返しの坏蓋。B I類に属するものが大半はあるが、僅かにA類に近いもの（5・6）もある。口縁端部の形態は1類（1・3・10・11）、2類（2・4・7・8）のような長く下に伸びるものが多く、僅かに4または5類が付くもの（5・6）もある。

12～15は有台坏で、A I類（15）に属するものが一点ある以外は全てB I類に属する。高台の形態は、図示しなかったものも含めれば、高くしっかりした高台の1類（15）が多く、次いで2類（13・14）が多い。

16は鉢で、底部付近を欠損する。内外面にヨコナデのみを施すB類に属する。

18は肩部下位以下を欠損する短頸壺でA類に属する。肩部の鋭く張った器形をしており、肩衝壺として扱って良いものかもしれない。また、短頸壺の蓋と思われる17も出土している。

19は口頸部と高台部を欠損する長頸瓶である。

（3）1号窯跡Ⅱ次床（最終床）出土須恵器（第9・10図、写真図版5～7）

この床面遺物は、土器の色調と焼け具合から3つに区分できる。黒色または暗赤灰色に焼け歪み、乳白色の自然釉が厚くまたはゴマシオ状に付着している土器（aグループ）、灰色または灰白色に普通に焼けている土器（bグループ）、外面に緑色の自然釉が厚く付着している土器（cグループ）が存在し、前者2つは比較的まとまった出土状況を示している。また、aグループの土器は、次床の取り残しと思われる土器と接合関係にあるため、焼台としての可能性が強い。これに対し、b・cグループは窓取り残しの土器と思われる。

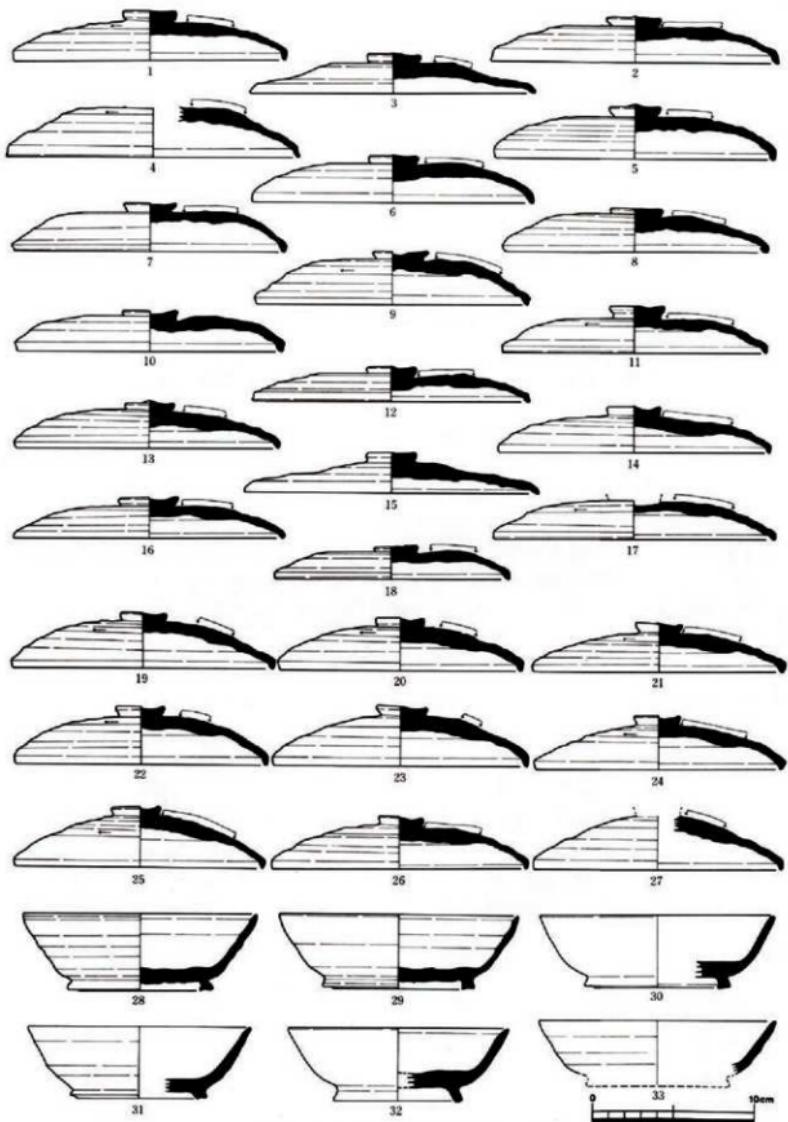
器種は、坏蓋、有台坏、無台坏、鉢、高坏などの供膳器、壺や壺瓶類、坏類などの貯蔵器が確認されている。個体数の比率は破片数で見ると、坏蓋298点、坏類140点（うち有台80点、無台57点）、鉢1点、瓶22点、壺瓶類17点、壺類132点を数え、口縁部計測法では坏蓋62.8%、坏28.3%、高坏2.7%、壺2.5%、壺3.7%である。先にも触れたように、aグループとした焼台の土器やcグループの土器には坏蓋が多く、上記の器種比率になるのも当然ではあるが、坏身の比率もかなりの量を占めていることを考えれば、供膳器主体の器種組成をもっていることは間違いないと考える。

第9図1～27は折り返し口縁の坏蓋。これらも上記のa～cグループに分けられるのだが、グループによって器形や口径が異なるといった傾向が見られる。つまり、aグループ（1～15）及びbグループ（16～18）はB I類に属するものが大半で、cグループ（19～27）はA I類に属するといった傾向である。口縁端部の形態についてもA I類とB I類とでは異なった傾向が見られる。A I類には短く厚い5類（19～25）のものが多く、2類（27）や4類（26）がこれに混じる。B I類は4類（11～14・16・17）、5類（7～10）のような短いものと1類（1～4）、2類（5・6・15）のような長いものがほぼ同量存在する。

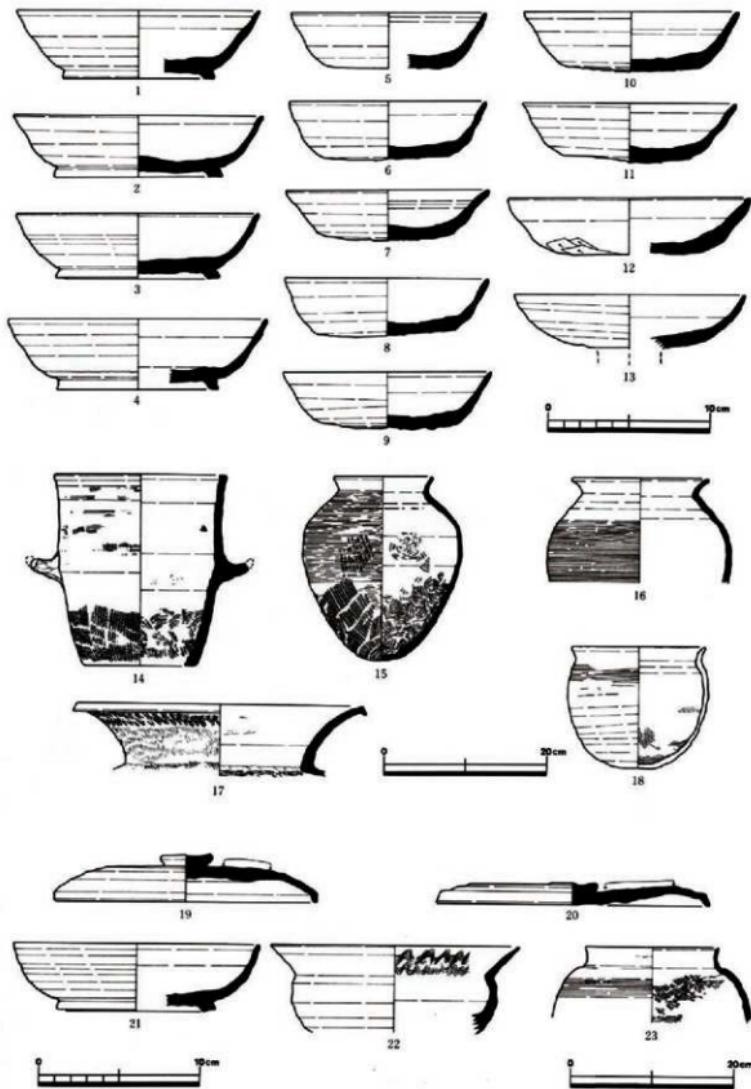
第9図28～33、第10図1～4は有台坏で、A I類とB I類にはほぼ分けられる。A I類はcグループに、B I類はbグループに入るものが多いため。高台の形態はA I類には5類（28・29・3）が付くことが多く、B I類には2類（1・4）、3類（2・3）が付く傾向をもつ。

第10図5～12は無台坏で、全てB I類に属するbグループのもの。器形がやや偏平なものとやや深身のものとが存在するものの、底部はいずれも丸底風であり、細分は困難である。また、12のように手持ちヘラ削りの調整技法を施したものもある。

第10図13は脚部を欠損するため断定はできないが、高坏の坏部と思われる。坏部の器形は浅



第9図 1号窯跡II次床出土遺物 (S=1/3)



第10圖 1号窯跡II次床(1~17)及び窓体覆土(18~23)出土遺物
(1~13・19~22: S=1/3, 14~18・23: S=1/6)

い塊状を呈し、器面調整は底部付近をヘラ削り、内面を刷毛のような工具でナデ調整している。

第10図14は壺で、底部から口縁部にかけては真っすぐに立ち上がるずん胴の器形を呈す。整形技法は上半を刷毛調整、下半を叩き調整その境をカキ目調整によって仕上げている。

第10図15～17は甕。15・16は小型品のC類、17は大型品のA類である。15はC類の中で最も小さく、口径12cmを測り、口縁端部の上端を若干つまみあげる。16は口縁端部を丸く仕上げている。このC類の土器はcグループに入るもので、歪みが著しく、復元不可能な破片が多い。17は口縁端部の下端を垂下させるもので、口縁部上位に櫛描き波状文を2段施す。aグループに属するもので、II次床焼台として考えられるものである。

(4) 1号窯跡Ⅱ次床覆土出土須恵器 (第10図、写真図版7)

器種は、坏蓋、有台坏、無台坏、鉢、すり鉢などの供膳器、長頸瓶、横瓶、短頸壺などの壺瓶類や甕類などの貯蔵器が確認されている。個体数の比率は破片数で見ると、坏蓋75点、坏類25点（うち有台12点、無台11点）、鉢6点、壺瓶類9点（うち長頸瓶2点、横瓶3点、短頸壺1点）、甕類62点を数える。出土量が少ないため、口縁部計測法での比率は信憑性にかけることと、II次床に接合するものが多いことから、破片数の示呈のみにとどめる。

15・16は折り返し口縁の坏蓋で、いずれもaグループのBⅠ類に属する。口縁端部の形態は15が2類、16が1類で、II次床焼台の土器群に共通する。

17是有台坏で、BⅠ類に属し、bグループに入る。

18は鉢で、口縁部内面に粗雑な櫛描き波状文を2段（上6条、下4条）に施す。

19は胴部下半以下を欠損する短頸壺。器形は胴部の丸いB類に属し、底部は丸底を呈すると思われる。

(5) 1号窯跡前庭部出土須恵器 (第11・12図、写真図版6～8)

器種は、坏蓋、有台坏、無台坏、鉢、すり鉢などの供膳器、瓶、長頸瓶、広口瓶、横瓶、短頸壺などの壺瓶類、坏類などの貯蔵器が確認されている。個体数の比率は破片数で見ると、坏蓋299点、坏類152点（うち有台74点、無台15点）、鉢18点、すり鉢4点、瓶1点、壺瓶類55点（うち長頸瓶22点、広口瓶1点、横瓶2点、短頸壺14点）、甕類340点を数え、口縁部計測法では坏蓋29.9%、坏18.4%、鉢8.4%、すり鉢6%、広口瓶8%、短頸壺7.4%、甕22%である。

第11図1～3は折り返し口縁の坏蓋で、総てB類に属する。1・2は口径17cm程度でI類に、3は22cm程度でII類にはいる。口縁端部の形態は1と3が1類、2が3類のもので、総て折り返しの長い形態である。

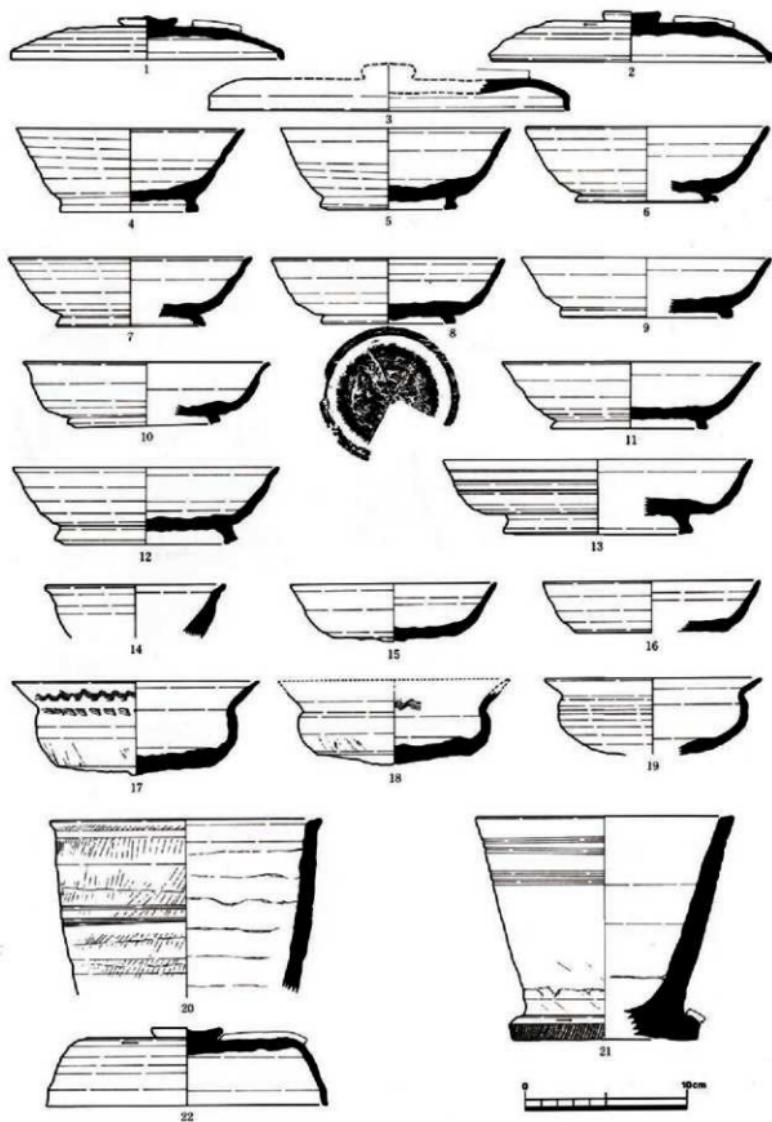
第11図4～13は有台坏で、4～6はAⅠ類、7～12はBⅠ類、13はBⅡ類にそれぞれ属す。高台の形態はAⅠ類には5類が付き、BⅠ類には2類（7・8・11）が多いようである。13は19cm台の大型のもので、胎土や色調から見ても、3の坏蓋とセット関係にあると思われる。

第11図14～16は無台坏。15はBⅠ類に、16はBⅡ類にそれぞれ属する。14は底部を欠損する破片であるため、はっきりしたことは言えないが、丸底のぶ厚い底部をもつ可能性がある。器形上、無台坏として位置付けて良いものか判断しかねたため、分類の項目としては扱わなかった。

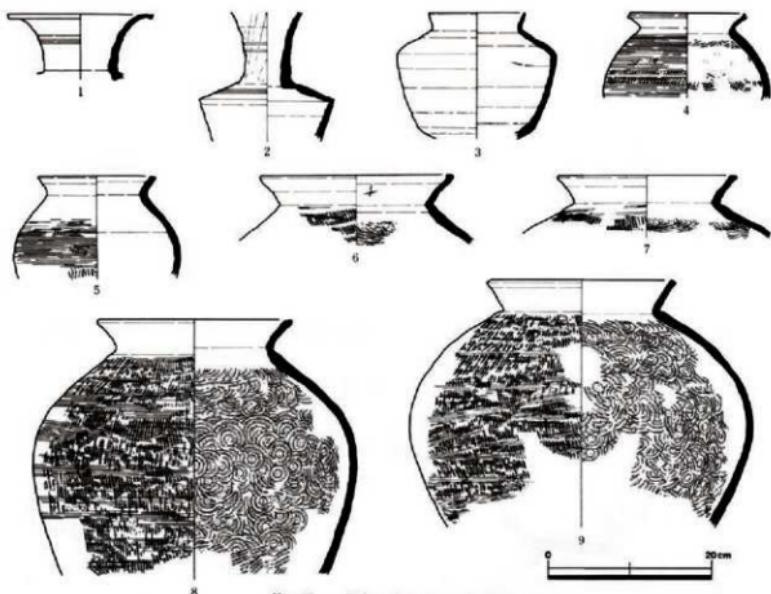
第11図17～19は鉢。櫛描き波状文の有無から17・18はA類、19はB類にそれぞれ分けられる。また、17には波状文の下にヘラ状工具による連続刺突文が施されている。

第11図20・21はすり鉢で、刷毛調整を施すA類とナデ調整のB類（BⅡ類）が存在する。

第12図1は広口瓶の口頸部破片。口縁部の外反が著しく、口縁端部の上端を突出させる。



第11图 1号窑前部出土物 (S=1/3)



第12図 1号窯跡前庭部出土遺物 (S=1/6)

第12図2は口縁部と底部付近を欠損する長頸瓶の破片である。肩部の屈曲は鋭く、頸部と胴部上位に2条の沈線を施す。

第12図3は底部付近を欠損する短頸壺の破片で、B類に属する。肩部はやや緩く屈曲し、口縁部はやや外傾する。また、短頸壺の蓋と思われる第11図22も出土している。

第12図4～9は甕。口径の大きさにより小型のC類(4・5)と中型のB類(6～9)に分けられる。口縁部の形態はB・C類ともだいたい似ているが、4のような口縁部上端を突出させるものもある。

(6) 1号窯跡灰原出土須恵器 (第13～16図、写真図版5～8)

器種は、坏蓋、有台坏、無台坏、鉢、すり鉢などの供膳器、瓶、長頸瓶、広口瓶、横瓶、短頸壺などの壺瓶類、甕類などの貯蔵器が確認されている。個体数の比率は破片数で見ると、坏蓋1352点、坏類815点（うち有台405点、無台55点）、鉢39点、すり鉢19点、甕1点、壺瓶類224点（うち長頸瓶107点、広口瓶5点、横瓶10点、短頸壺17点）、甕類2059点を数え、口縁部計測法では坏蓋48.1%、坏40%、鉢1%、すり鉢0.8%、長頸瓶2%、広口瓶0.5%、横瓶1.2%、淨瓶0.7%、短頸壺0.5%、甕5.2%である。

第13図、第14図1～3は坏蓋。口縁部に返りをもつもの（第13図1・2）と折り返し口縁のもの（他のものすべて）とが存在する。有返り口縁のものは口縁部の破片で、返りの部分が比較的しっかりと作られており、回転ヘラ削りも口縁部付近まで及び、丁寧な作りをしている。このような形態から、当窯跡群の他の製品よりも古い感じがもたれ、また、いずれの土器も内面に自然釉が付着していることから、当窯跡の製品とは考え難く、混入品として扱いたい。

折り返し口縁のものは、A I類に属するものとB I類に属するものがある。A I類に属するものは、口縁端部形態が5類（第13図26・27、第14図1～3）や2類（第13図25）の厚手のものがつくことを特徴とする。また、焼け具合はⅡ次床でcグループとした緑色の自然釉が付着するものである。B I類に属するものは、口縁端部形態が薄く長く折り返す1類のもの（第13図3～12）が多く、次いで2類（第13図13～19）、3類（第13図20・21）、4類（第13図22・23）、5類（第13図24）がそれに混じるといった状況である。A I類は自然釉の付着状態からⅡ次床の製品として考えて間違いないと思われるが、B I類についてはⅠ次床とⅡ次床のどちらの可能性ももつ。しかし、数量の多い、口縁端部を長く折り返す1・2類はⅠ次床の製品の可能性が強く、一部Ⅱ次床の製品も含まれるもの、B I類の大半はⅠ次床に伴うものと考えたい。

第14図4～25、第15図1～19は有台坏。A I類とB I類に分けられ、B I類に属するものが過半数を占める。B I類には高台形態2類（第14図4～24、第15図1・2）を付す場合が多く、次いで1類（第15図3～6）、3類（第15図7～9）、4類（第15図10～13）、5類（第15図14～16）と続く。一番ボビュラーな2類の高台が多く付されることは当然の結果であるが、古い様相をもつ、つまりⅠ次床の製品と思われる1類が一定量存在する。このB I類の多くはⅠ次床に伴うものと考えられるだろう。B I類に比べ、A I類に属するものは1割に満たない量で、高台の形態が1類のもの（第15図17～19）と5類のもの（第15図20）とに分けられ、後のものには緑色自然釉が付着している。前者はⅠ次床に、後者はⅡ次床に伴う製品と考えられよう。

第15図21～23は無台坏。総てA類の器形を呈し、21・22はI類、23はII類の法量である。調整は、前者が底部回転ヘラ切り後軽いナデ調整を施すのに対し、後者は底面を回転ヘラ削り調整によって切り離し痕を消去している。これらA類の器形は有台坏A I類に似た径高指数を示しており、その系譜上の類似性が予想される。そして、23は内面に緑色自然釉が厚く付着している状況が見られ、Ⅱ次床でcグループとした坏蓋や有台坏A I類（後者）と共にⅡ次床の製品である可能性が高い。

第16図1は鉢。内外面にナデ調整を施すB類に属する。

第16図2・3はすり鉢。外面に刷毛調整を施すA類（2）とナデ調整を施すもので、櫛描き波状文をもつB類（3）とがある。また、すり鉢の底部と思われる4も出土している。

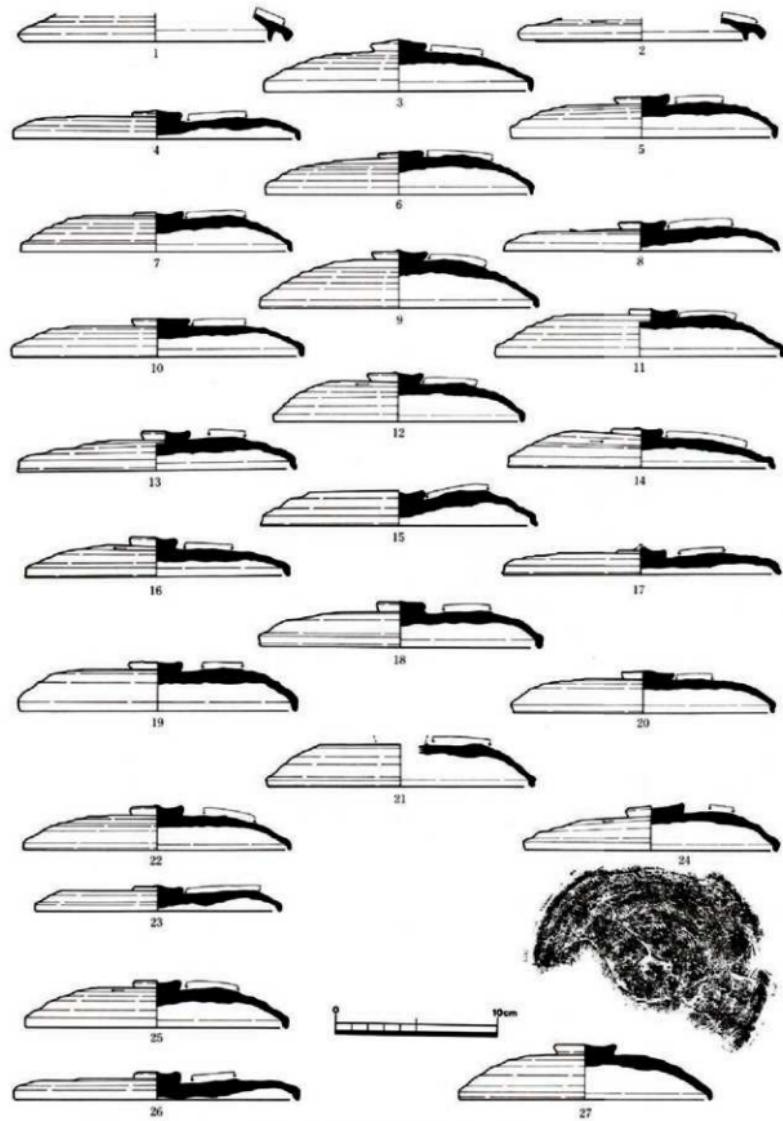
第16図6・7は長頸瓶。6は完形に近いものだが、歪みが著しく胴部がひしゃげている。口頸部の器形は筒状に伸びるもので、口縁部で緩く外反する。口縁端部は丸く仕上げる。7は胴部の破片で、胴上部に最大径をもつ。

第16図8は淨瓶。丸い胴部から細長い口頸部に移行し、端部で短く外反する器形と思われる。

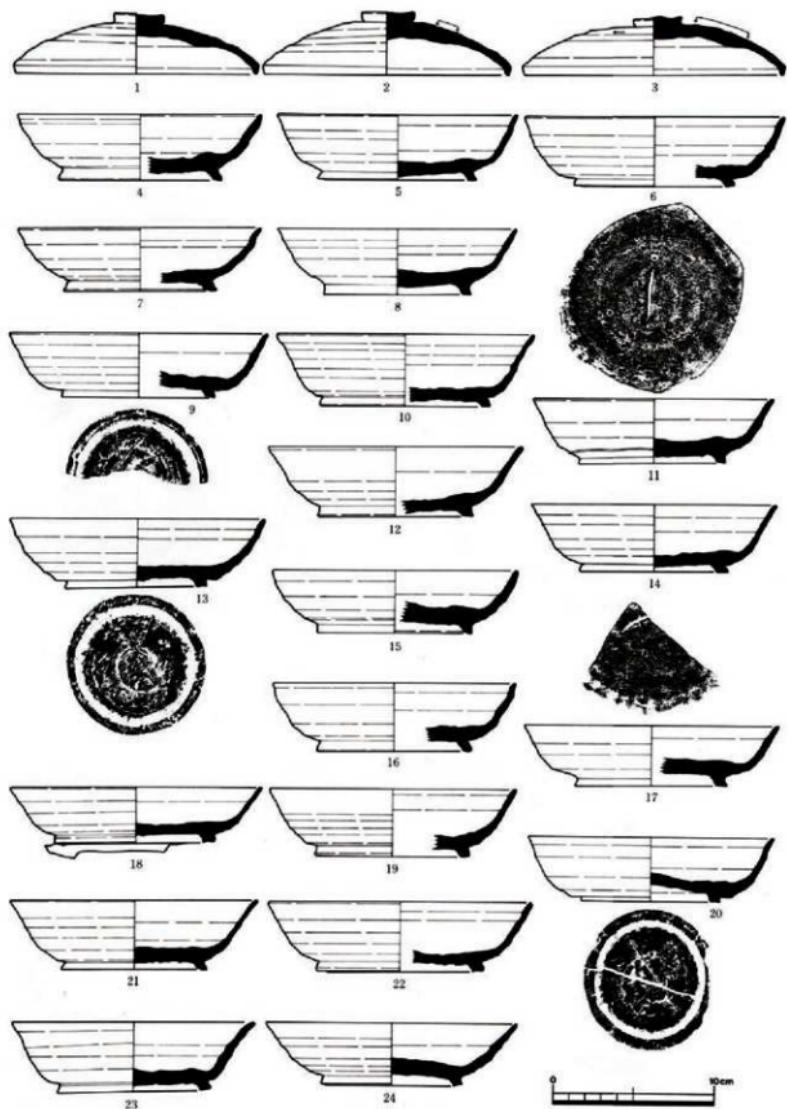
第16図9は横瓶。やや細目の頸部から強く外反する口縁部へ至るもので、口縁端部は丸く仕上げている。

第16図10・11は短頸壺。10はC類に属する小型品で、口径よりも胴部径が大きいような潰れた器形を呈する。11は胴部が球形を呈するB類に属するもので、胴部の調整は壺と共通する。

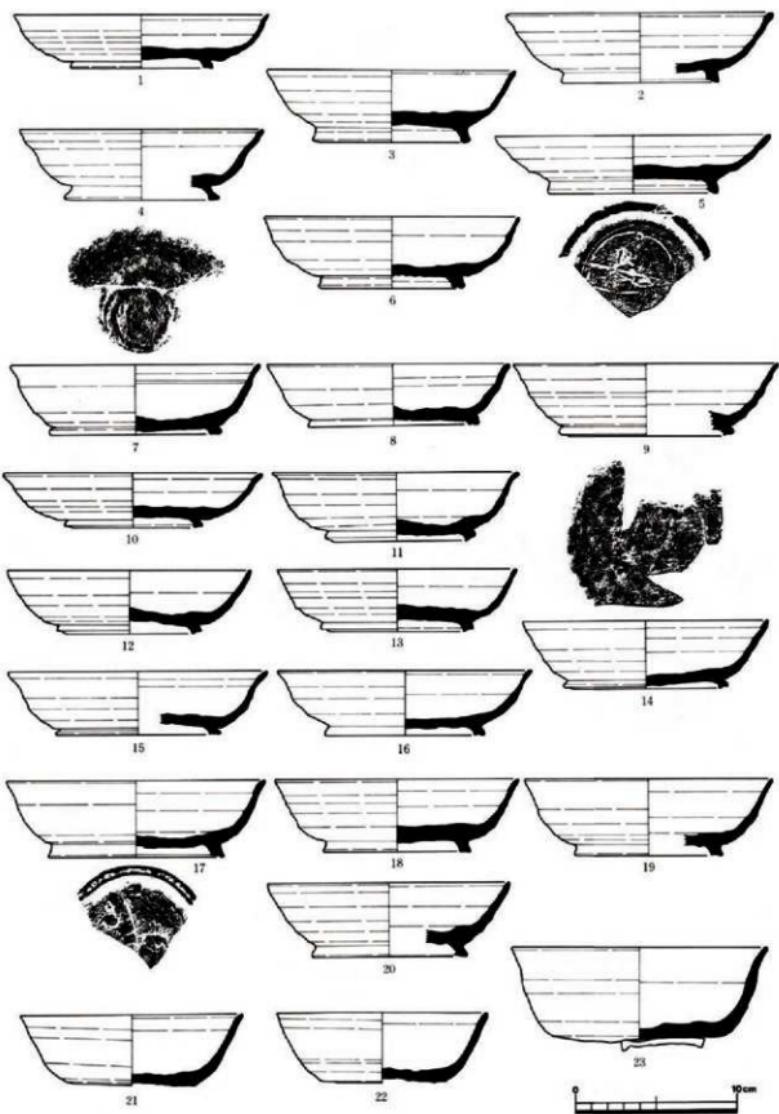
第16図12～18は壺で、B類（14～18）とC類（12）がある。B類は口縁端部が平坦なものであるが、14・17のような端部の内側が肥厚するものと15・18のような端部外側が肥厚するものとがある。また、13のような土師器的な器形と調整（内面ヘラ削りまたは磨き）をもつ異なった製作技法をもつものもある。



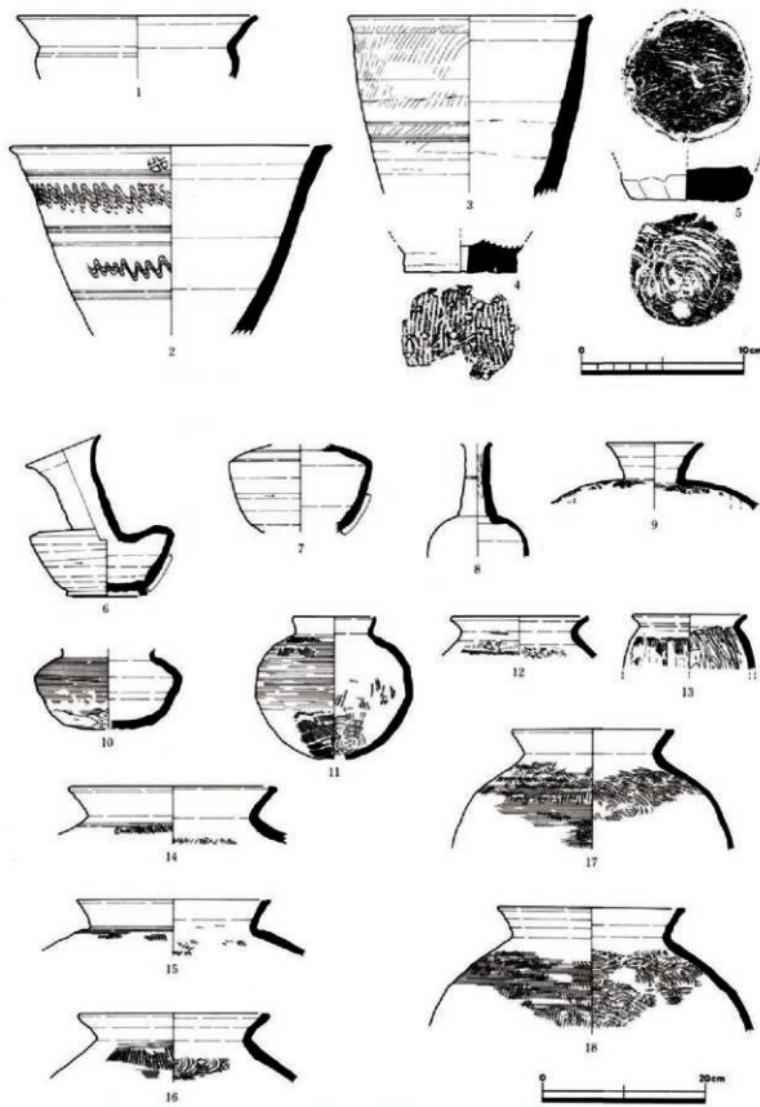
第13图 1号窑跨灰原出土遗物 (S=1/3)



第14図 1号窯跡灰原出土遺物 (S-1/3)



第15図 1号窯跡原出土遺物 (S=1/3)

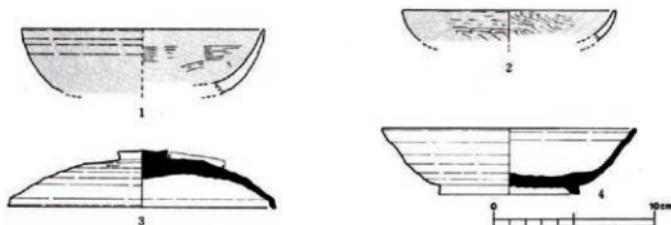


第16圖 1號窯跡灰原出土遺物(1~4 $\pm S=1/3$, 5~18 $\pm S=1/6$)

(7) 土坑出土須恵器 (第17図)

3基の土坑から出土した須恵器は138点を数えるが、ほとんどが破片で灰原や窯体出土のものと接合するものが多いことから、灰原からの流れ込みの製品と考えられる。その中でも比較的出土量が多かった3号土坑の出土須恵器について触れておきたい。

復元実測できたものは3・4の壺蓋と有台壺の2点だけである。3はA I類に属する折り返し口縁のもので、緑色の自然釉が厚く付着している。折り返しの形態は1類で薄く長く伸びる。4はB I類に属するもので、高台の形態は2類である。



第17図 2号窯跡(1-2)及び3号土坑(3-4)出土遺物 (S=1/3)

(8) 壺の胴部叩き文様 (第18・19図、写真図版9)

ここで、壺の胴部叩き文様について全体を通してみて行きたいと思う。壺の胴部叩きについては、最近、内堀信雄氏の研究（内堀1988）が目を引く。氏の分類に基づいて、当窯跡群の壺を分類し、検討してみたいと思う。

叩き文様には、外面で平行線文と格子文（K類）があり、平行線文には木目が掘り込みに対し直行するもの（H a類）、木目が右上がりに斜行するもの（H b類）、木目が左上がりに斜行するもの（H c類）がある。内面では同心円文があり、木目の見られないもの（D a類）と年輪状の木目の見られるもの（D b類）が存在する。また、同心円文と平行線文とが融合したようなもので木目の見られないもの（ここでは仮にD H類とする）も存在する。

この叩き文様の組み合わせは、3つのタイプに大別される。文様1類は外面H a類+内面D a類を基本として、僅かに外面H b類やH c類がこれに混じる。この文様のものは、外面に一部カキ目調整が施されるものもあるが、一般的ではない。壺A・B類のどちらにも用いられる文様である。文様2類は外面H c類+内面上半D b類、下半D H類が施されるもので、外面にはカキ目調整を施すものを基本とする。壺B類にのみ認められる文様である。このほかに、外面H a類+内面D a類を基本として外面K類がこれに混じるタイプ（文様3類）のものもある。これは外面にカキ目調整と内面にナデ調整を著しく施すもので、壺C類にのみ認められる文様である。

出土地別に見ると、I次床（II次床焼台の一群と接合関係にあるため、これも含める）では総て文様1類に属するもので、外面H a類+内面D a類のもの（第18図1～6・8・9）と外面H b類+内面D a類のもの（第18図7）がある。II次床では文様2類（第18図10～14）のみと思われる。文様1類のものが僅かに認められるが、焼台の可能性が大きい。II次床覆土出土のものも文様2類（第18図15・16）が主体的で、焼台と思われるような文様1類が僅かに認められる程度であり、II次床の製品と共通する。灰原及び前庭部では文様1類（第19図1～8）、



第18図 痛患器変胸部叩き文様 (S=1/2)



第19図 頸唇器後部叩き文様 (S-1/2)

文様2類（第18図17・18、第19図9～15）、文様3類（第19図16～20）がそれぞれ46%、45%、9%の割合で存在する。

最後に年代性と地域性について若干触れておきたい。文様1類のようなD a類は8世紀第1四半期以前の時期に北陸に一般的に見られる文様であるのに対し、文様2類はこの時期に共存して見られるものの、その量は少なく、一部の窯跡群で見られる程度である。この時期はD a類以外はD b類が従来に認められる程度であり、D a類で統一された汎北陸的な様相を呈している（内堀1988）。このような状況の中で、当窯跡のD b類つまり文様2類が文様1類とはほぼ同率の生産を行っていることや、文様1類と基本的には同じ文様をもつがナデやカキ目調整が著しい文様3類のものが一定量生産されていることは、かなり特質な様相として考えることができ、異なる系譜の技術導入があった可能性をもつ。

第2節 土師器

当窯跡の土師器は総破片数で10点と少なく、2号窯跡（土師器窯）、1号窯跡II次床、灰原等から出土している。1号窯跡II次床から出土した完形の壺を除けば、總て2号窯跡で焼成された製品と考えられる。以下に説明を加える。

（1）1号窯跡II次床出土土師器（第図10、写真図版8）

II次床の床面に伏せた形で完形の壺が1個体だけ出土している。ほぼ球形を呈する胴部から口縁部で短く外反する器形を呈するもので、器高14.9cm程度の小型の壺である。胴部調整にカキ目やヨコナデ調整が施されており、ロクロ土師器として定義づけられるものの範疇に入ると考える。

（2）2号窯跡出土土師器（第17図1・2、写真図版8）

2号窯跡の床面から5点とその周辺の灰原等から4点の破片が出土している。いずれも内外面に赤色塗彩を施す壺で、ほとんどが身の浅い壺形を呈する無台のものと考えられる。調整技法は器面剥落のものが多いため詳細が不明であるが、ヘラ磨き調整のものが一般的であろう。

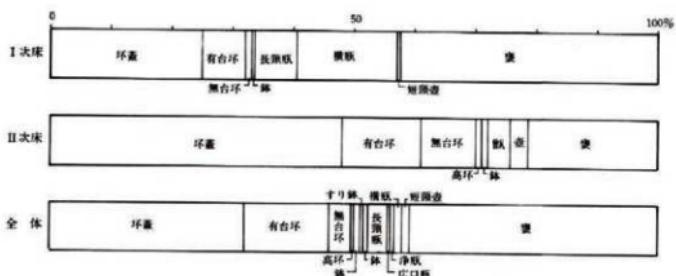
第3節 小結

以上のように、当窯跡出土遺物の説明をおこなってきたわけであるが、まず、1号窯跡の須恵器全体の様相について述べ、次にI次床とII次床の様相の差異について検討を加えてみたいと思う。

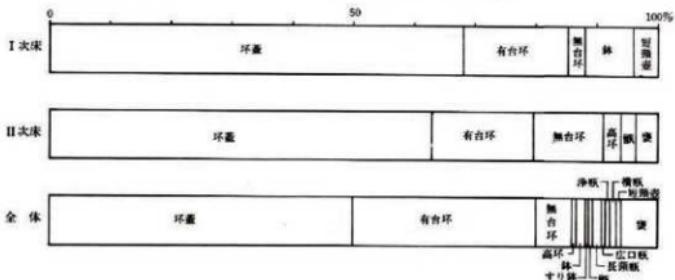
器種の構成は、第20図のグラフのとおり壺蓋と壺身の供膳器が破片数計測法（5割）、口縁部計測法（8割以上）ともにかなり高い比率を占める。次いで多いものは壺、長頸瓶などで、一般的にこの時期のどの須恵器窯跡にも見られるような器種構成の比率を示すと言えよう。I次床、II次床の床面遺物の構成比率に関してても供膳器が高い比率を占めることは、全体の様相と同じである。しかし、特に壺蓋の量が多い状況がみられる。これは焼台として使用されたものがその半数を占めることから考えれば、当然の結果と言えよう。

次に各器種個々の様相について述べてみたい。まず、壺蓋についてだが、返りをもつ2つの破片を遺物の説明で述べたとおり1号窯跡の製品から除外すれば、總て折り返し口縁のものである。A I類、B I類、B II類の3種が存在する。主体となるのは山笠状に器高の高いA I類と天井部に平坦面をもつB I類で、A I類は口径14～16cmに、B I類は口径16～18cmに法量がはっきりと分かれる。そして、A I類には緑色自然釉の着くもの（II次床でcグループとした

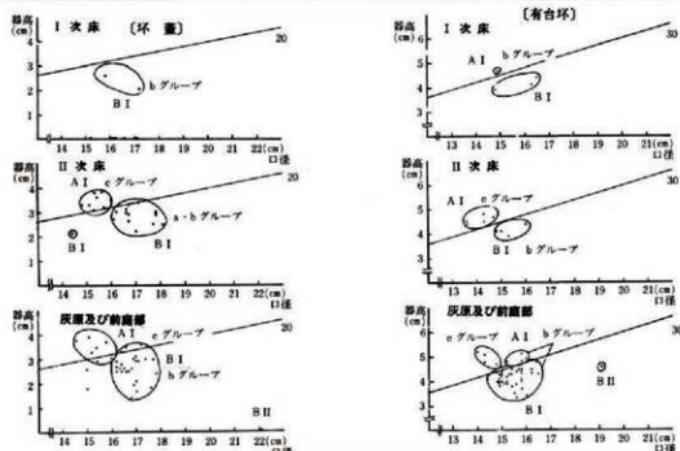
[破片数計測法による1号窯跡出土須恵器の器種の比率]



[口縁部計測法による1号窯跡出土須恵器の器種の比率]



第20図 須恵器の器種構成比率



第21図 須恵器蓋環法量分布図

もの)が大半で、口縁端部が短く厚い5類のものが多いのに対し、B I類には緑色自然釉の着くものは無く、口縁端部も1類や2類の長いものが主体となる。この2つは明らかに系譜の異なるもので、編年上序列できるものとは考え難い。このほかに法量の異なるB II類が1点だけ出土している。

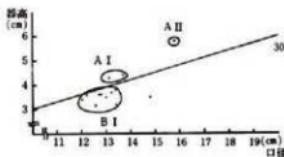
有台坏も坏蓋と同様にA I類、B I類、B II類の3種が存在する。しかし、この3つがそのまま坏蓋のものに統て対応する訳ではない。A I類は坏蓋と同様の緑色自然釉が着き、口径が14~15cm程度のもの(以後A I類①とする)と緑色自然釉が付着せず、口径が15~16cm程度のもの(以後A I類②とする)があり、前者では高台形態5類が、後者では1類が付く傾向をもつ。そして、A I類①が坏蓋A I類のものと、A I類②が坏蓋B I類のものとセット関係にあると考える。坏蓋B I類はこのほかに有台坏B I類ともセットをなすと思われる。B I類は口径が16~18cmで、2類の高台が付き、口径やしっかりした形態の高台が付くことでA I類②と共に共通点をもつ。B II類は坏蓋B II類とセットをなすと考えられるもので、A I類、B I類とはかなり口径の隔たりがあり、2法量の器種が存在することは事実である。しかし、これらは1点だけの出土であり、総体的には1器種=1法量の原則を守っている坏群であると考えたい。

無台坏はA I類、A II類、B I類の3種がある。B I類は口径が12~14cm程度で、体部と底部の境が不明瞭な厚手の製品である。これに対し、A I類は口径では差異は無いが、底部が平底を呈し、やや薄手の製品で、2つが異なる様相を呈す。また、法量の異なるものでA II類が一点だけ存在し、法量分化の感を匂わせる。しかし、これも有台坏等と同様、全体の様相としては1器種=1法量の原則は守っているものとして評価できよう。

以上の坏類は明らかに2つの系統の土器が存在している。それは坏蓋A I類+有台坏A I類①のセット及び無台坏A I類・A II類の一組(A群)と坏蓋B I類+有台坏A I類②・B I類のセット及び無台坏B I類の一組(B群)で、後者が北陸で一般的に見られる器形である。A群の系譜については後で述べるとして、B群土器の、坏蓋が折り返し口縁だけで、口縁端部が長く伸びるものが多いこと、有台坏の高台が長めで、しっかりした作りのものが多いこと、無台坏の底部がやや丸味をおびること、1器種=1法量を原則としていることなどから判断すれば、平城編年I期に併行する様相として位置付けられよう。

次に、鉢として扱った、頸部で「く」の字に屈曲する器形のものについて若干触れておきたい。この器種は櫛擦き波状文の施文を除けば、北陸地方の窯跡において出土量が少ないものの、似たような器形のものが出土しており、坏や小壺として扱われている。しかし、いずれの窯跡も8世紀の第2四半期に位置付けられているもので、当窯跡よりも一型式新しく位置付けられる。このような器種の初源的なものとして位置付けられるかもしれない。

壺瓶類は出土量が少なく多くは語れないが、比較的の出土量が多い長頸瓶について触れておきたい。口頸部は筒状に細く伸び、口縁部で外反して口縁端部を丸く仕上げる。胴部はそろばん玉状になるものもあるが、胴部上位に最大径をもって屈曲部より上が平坦になるものが一般的である。高台は比較的短くなり、脚状になるものは無い。当窯跡の前の段階では見られない器形であり、この時期から宮都的な器形が導入されたものと評価できよう。また、口頸部1点の破片ではあるが、広口瓶が出土している。口縁部は著しく外反し、端部を平坦に仕上げている。



第222図 須恵器無台坏法量分布図

広口瓶の出現時期については当窯跡の時期つまり平城Ⅰ期併行とする考え方（吉岡1983）とこれに後続する平城Ⅱ期併行とする考え方（田嶋1988）がある。しかし、当窯跡で現に出土しており、それに畿内の陶邑窯跡群でも平城Ⅰ期併行には出現していることから考えれば、出現期を当該期に求めることが妥当であり、長頸瓶と共に宮都的器種として導入されたものと評価すべきではなかろうか。

以上、個別の器種から当窯跡群の編年的な位置付けを考えてきたわけであるが、次にⅠ次床（Ⅱ次床の焼台も含める）とⅡ次床の様相及びその時期差について述べてみたい。供膳器についてはⅠ次床で壺蓋BⅠ類+有台坏BⅠ類・AⅠ類②のセットと僅かに無台坏の破片、つまりB群土器で占められる。これに対し、Ⅱ次床ではA群土器が主体的で、壺蓋BⅠ類+有台坏BⅠ類のセットと無台坏BⅠ類のB群土器が1~2割出土している。この中から、北陸一般の様相とは異なるⅡ次床のA群土器を除外して考えれば、Ⅰ次床とⅡ次床との間で、若干の形態的な差異を見ることができる。Ⅰ次床では壺蓋口縁端部に薄くて長い形態が多いこと、有台坏にAⅠ類②が存在し、高台の形態が高いものやしっかりしたものが多いこと等の様相に対し、Ⅱ次床では壺蓋口縁端部に薄くて長い形態は存在せず、やや厚い形態が主流であること、有台坏にAⅠ類②ではなく、高台の高い形態は存在しないことといった様相をもつ。Ⅰ次床の様相は飛鳥Ⅳ期併行の折り返し口縁壺蓋+有台坏の様相を色濃く残したものと考える事ができ、平城Ⅰ期併行の中でも古い時期、能美窯跡群における筋生城山奥窯段階（木立1985）に位置付けられる。Ⅱ次床の様相は上記の様相がやや崩れたものとして評価できるが、形態的にはまだしっかりしており、無台坏も器高の高いものが主体的であることから、Ⅰ次床より後出する様相ではあるが、型式を画するものとは考えられない。この壺類の編年については考察で詳細を述べる。

供膳器の他に床面から出土したものとしては甕が挙げられるが、これも前述したとおり、Ⅰ次床とⅡ次床とでは異なる様相を呈する。Ⅰ次床では叩き文様1類、Ⅱ次床では叩き文様2・3類といった様相の違いははっきりと転換しているものであり、供膳器から求められたⅠ次床とⅡ次床の僅かの時期差から考えれば、同じ叩き道具を採用しなくなつたという製作段階での大きな転換があったものと考えられる。これは供膳器でも見られた大きな転換、つまり、1号窯跡の築窯当時の北陸で一般的に見られる様相からⅡ次床時の北陸では一般的でない様相への転換は、異なる技術の導入または異なる技術を有した工人の介入があったことを意味しているのではないだろうか。

それでは、Ⅱ次床の供膳器A群土器や甕叩き文様2・3類の土器はどのような系譜がたどれるのだろうか。同時期の東海と畿内の様相を見てみたい。

東海地方の尾張猿投山西南麓古窯跡群や美濃洲衛古窯跡群では天井部が丸く山笠状に開く壺蓋が折り返し口縁壺蓋の出現時から継続的に見られ、甕の胴部叩き文様2類のような年輪状に木目の残る同心円文が美濃洲衛古窯跡群の尾崎大平1号窯跡において見られるようである。以上の2点においては似た様相をもっているが、壺蓋に伴う有台坏の形態（猿投窯・美濃洲衛窯ともに底部が厚く下に突出する器形、底部に入念なヘラ削りを伴う、顕著な法量分化などの特徴が見られる）や甕の仕上げの調整（猿投窯・美濃洲衛窯にはカキ目調整が見られない）ではかなり異なる様相を示しており、ストレートに東海地方にその系譜を求める事はできない。

次に、畿内地方の様相についてだが、古くから一大窯跡群として大きな勢力を保ってきた和泉陶邑窯を例にとってみたい。中村編年（中村1981）のⅣ型式1段階が当該期にあたると考えられるが、この時期の窯跡の土器は有台坏の底部が平坦であることと甕胴部に外面カキ目調整

及び内面ナデ調整を施すといった類似点以外は共通する部分がなく、系譜を同じくするものとは考えられない。それよりも供膳器A類土器や壺叩き文様1類との共通点が多く、これらの土器群が畿内からの系譜上の流れをもつものとして位置付けられよう。

以上、東海・畿内地方の様相を見たわけだが、Ⅱ次床の土器群の直接的な系譜を求めるることはできなかった。しかし、Ⅱ次床の土器群を特徴付ける天井部の山笠状に聞く坏蓋形態や壺叩き文様D b類は尾張・美濃地方、特に美濃洲衛古窯跡群に求められるようであり、ストレートな製作技法の導入でなかったとしても、根本的な系譜は当地に求めることができるかもしれない。このⅡ次床の土器群は先にも述べたように、製作工人レベルでの技法導入によって生まれたもの、つまり美濃洲衛古窯跡群の系譜をもつ技法と陶邑的な（北陸的）技法がどこかで融合され、当窯跡にもたらされたと考えたく、当窯跡在地の製作工人が在地の技法に美濃洲衛窯的な技法を導入させて作り出したものとは考えたくない。つまり、Ⅱ次床の操業段階で、Ⅰ次床操業段階の製作工人とは異なる技術系譜をもつ人が、介入してきたものと考える。しかし、その系譜がはっきりしない以上、ただの空想でしかないのかもしれないが、問題点を残しつつも仮説を提示してみた。今後、東海地方特に美濃洲衛窯や尾張猿投窯の様相をはっきりと把握した後、再考してみたいと考える。

註

- (1) 今回の報告で、すり鉢としたものは葛原遺跡器種分類（田嶋1987）の中で、鉢F類とされたものであり、以下に葛原遺跡の……類と記したものもこれに基づく。
- (2) 南加賀古窯跡群の中では、戸津六字ケ丘2・4号窯跡（宮下1987）でD b類の存在が確認されているが、その量比は主的なものとは言いがたく、桃の木山1号窯跡の様相と同質のものとは考えがたい。
- (3) 北野氏が煮沸形態土器について考察されたもの（北野1986）の中で、壺D II類（ロクロ成形・調整を伴う小型品）として分類されたものである。
- (4) 小杉流田NO16号窯跡1・2号窯跡灰原において、かなり形態上似ているものが数個体出土しており、報告では壺Bとして扱われている（上野他1980、山本他1986）。また、辰口の来丸サクラマチ1号窯跡最終床でも数個体出土している（平田1984）が、部の形態が壺に近いもので、この器種と同系統のものであるかはまだ問題がある。
- (5) 和泉陶邑窯では、当該期に併行すると思われる中村編年 型式I段階の窯跡、KM269号窯跡、KM226号窯跡で広口瓶（壺）が出土しており（中村他1976）、中村浩氏もこの時期の器種組成として広口瓶を組み入れている（中村1981）。
- (6) 桃の木山1号窯跡の編年は以前木立氏によって3期編年がなされている（木立1985）。その内容はⅠ次床を1段階、Ⅱ次床焼台を2段階、Ⅱ次床製品を3段階とし、それぞれ湯屋窯3段階の新～蕎生城山奥窯の古、蕎生城山奥窯段階の新、来丸サクラマチ窯1段階に併行することとされている。しかし、この編年案はⅠ次床とⅡ次床焼台が同一のものであること（2者の間で接合するものが多い）からⅠ次床とⅡ次床の2期編年に訂正されるものである。また、Ⅰ次床とⅡ次床の年輪的な位置付けに関しては、ここで述べたようにⅠ次床は蕎生城山奥窯段階として差し支えないが、Ⅱ次床を来丸サクラマチ窯1段階、つまりサクラマチ3号窯跡に併行するものとは考えられず、蕎生城山奥窯段階の新しい様相または来丸サクラマチ3号窯跡との過渡的段階として位置付けたい。
- (7) 尾張猿投窯の岩崎17号窯式（植崎1983）及び美濃洲衛窯の尾崎大平1号窯期（渡辺1984）から折り返し口縁の坏蓋が出現するようであるが、その出現する段階からいずれも天井部が丸く山笠状に聞く形態をしており、当窯跡と併行期にあると思われる岩崎41号窯式（猿投窯）、地獄洞窯期（美濃洲衛窯）は勿論のこと、9世紀に入るころまで、その作風を残す。ただし、尾張猿投窯と美濃洲衛窯の坏蓋の基本的な形態は同じであっても両窯には若干形態的な差異があり、確実に分けられるようである（内堀信雄氏よりご教示）。
- (8) 内堀信雄氏よりご教示を受けた。なお、尾崎大平1号窯跡は渡辺編年のⅣ期後半、実年代では7世紀第4四半期に位置付けられている（渡辺1984）。

(9) この底部が突出する器形を特徴とするが、純てがこの形態というわけではなく、底部が平坦なものも一定量存在している。

また、有台环についても坏蓋と同様、尾張猿投窓と美濃洲衛窓とでは同一の形態を示すわけではなく、若干地域的な差異をもつようである。

(10) 良好的な資料としてはTK304号窓跡（井藤他1979）、TK315号窓跡（井藤・野上他1982）などが挙げられるが、いずれも中村編年では数段階にまたがるもので、V型式1段階の单独期に位置付けられる窓跡資料殆どないようである。丹波地方になってしまふが、丹波周山窓址3号窓跡3次・4次操業の一括窓器（宇野他1982）や消費地の資料ではあるが、平城宮SD1900A出土の須恵器一括資料（奈良国立文化財研究所1978）をその良好な資料として挙げたほうが良いかもしれない。

引用文献

- 井藤徹他 1979 「陶邑IV」 財團法人大阪文化財センター
井藤徹・野上丈助他 1982 「陶邑V」 財團法人大阪文化財センター
上野章他 1980 「小杉流通業務団地内遺跡群－第2次緊急発掘調査概要－」 富山県教育委員会
内堀信雄 1988 「須恵器更類に見られる叩き目文について」「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）」 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
宇野隆夫他 1982 「丹波周山窓址」 京都大学文学部考古学研究室
北野博司 1986 「加賀における7～8世紀の煮沸形縦土器部」「佐々木ノテウラ遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
木立雅朗 1985 「能美窓跡群の須恵器編年（1）北群」「辰口町湯屋古窓跡」 辰口町教育委員会
田嶋明人 1987 「篠原遺跡の土器組成とその特徴」「篠原遺跡」 石川県立埋蔵文化財センター
中村浩他 1976 「陶邑I」 財團法人大阪文化財センター
中村浩 1981 「出土須恵器の編年的考察」「和泉陶邑窓の研究」 柏書房
奈良国立文化財研究所 1978 「平城宮発掘調査報告書」
植崎彰一 1983 「猿投窓の編年について」「愛知県古窓跡群分布調査報告（Ⅲ）」 愛知県教育委員会
平田天秋 1984 「辰口町来丸サクラマチ窓跡（資料編）」 石川県立埋蔵文化財センター
宮下幸夫 1987 「戸津六字ヶ丘古窓跡発掘調査概要報告書」 小松市教育委員会
山本正敏他 1986 「小杉流通業務団地内遺跡群－第6次緊急発掘調査概要－」 富山県教育委員会
吉岡康暢 1983 「奈良平安時代の土器編年」「東大寺須横江生遺跡」 松任市教育委員会 石川考古学研究会
渡辺博人 1984 「美濃洲衛古窓跡群における須恵器編年」「美濃洲衛古窓跡群資料調査報告書」 各務原市教育委員会

(土器観察表)

須恵器・土師器色調一覧

須 恵 器	①	灰白色
	②	青味がかった灰白色
	③	褐色がかった灰白色
	④	灰褐色
	⑤	暗灰色
	⑥	青灰色
	⑦	暗青灰色
	⑧	黄色味がかった灰白色
	⑨	赤味がかった灰白色
	⑩	赤味がかった灰白色
	⑪	赤灰褐色
	⑫	赤味がかった暗灰色
	⑬	黄灰白色
土 師 器	⑭	浅褐色
	⑮	深い橙褐色
	⑯	桔褐色

須恵器・土師器胎土一覧

須 恵 器	①	白色微砂粒($\phi < 1 \text{ mm}$ 以下)を少量含む
	②	白色微砂粒と黒色粒子を少量含む
	③	白色微砂粒を通して有量含む
	④	白色砂粒($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$)を少量含む
	⑤	白色砂粒と黑色粒子を少量含む
	⑥	白色砂粒と赤色粒子を少量含む
	⑦	白色砂粒を通して有量含む
	⑧	白色砂粒を多量含む
	⑨	白色砂粒と小石($\phi 2 \text{ mm}$ 以上)を少量含む
	⑩	白色砂粒と小石と黒色粒子を少量含む
	⑪	白色砂粒と小石と黑色粒子を少量含む
	⑫	白色砂粒と小石と黒色粒子を通有量含む
	⑬	白色砂粒と小石と多量含む
土 師 器	⑭	白色砂粒と小石と黑色粒子を通有量含む
	⑮	白色砂粒と小石と多量含む
土 師 器	⑯	白色砂粒と小石と極めて多量含む
	⑰	砂粒を少量含む
土 師 器	⑱	砂粒と小石を多量、赤色粒子を少量含む

1号窯跡I次床出土須恵器

固 形 形 号	基 本 種 類	法 量 (cm)	成形調整方法	残存率	色 調 相	調 土	成 形 考
第8国 1	环 基	口径15.8 器高3.6	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	5%	⑤ ⑥ ⑦	良好 中がみ有り 内外面に自然 物付着	
第8国 2	*	口径15.2	平井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	5%	外④ 内⑤ ⑦	良好	
第8国 3	*	口径17.2	天井部へ一部へラ 削り 器高2.0 他はヨコナヂ	5%	外① 内⑤ ⑦	良好 中がみ度しい 内外面に自然 物付着	
第8国 4	*	口径17.1	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	5%	④ ⑤ ⑦	良好 中がみ度しい 内外面に自然 物付着	
第8国 5	*	口径15.2	天井部へラ削り 他はヨコナヂ	5% のみ	④ ⑦	今や 不良	
第8国 6	*	口径16.1	天井部へラ削り 他はヨコナヂ	5%	外④ 内③ ⑦	良好	
第8国 7	*	口径16.6	ヨコナヂ	口縁部 のみ	④ ⑤ ⑦	口や 良	
第8国 8	*	口径17.0	ヨコナヂ	口縁部 のみ	④ ⑤ ⑦	口や 良	
第8国 9	*	口径16.2	ヨコナヂ	口縁部 のみ	④ ⑤ ⑦	良	
第8国 10	*	口径16.0	ヨコナヂ	口縁部 のみ	④ ⑤ ⑦	良	
第8国 11	*	口径17.1	ヨコナヂ	口縁部 のみ	外② 内③ ⑦	良	
第8国 12	有台基	口径14.8 器高3.5 古墻10.4	波打回転へラ削り 波打丁寧ナナヂ 古墻ナナヂ 他はヨコナヂ	ほぼ 定形	外④ 内③ ⑦ 複合	良 中がみ有り 日々床地(?) と複合	
第8国 13	*	口径15.3 器高4.1 古墻10.5	波打回転へラ削り 後ナナヂ 古墻ナナヂ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良 中がみ有り 日々床地(?) と複合	
第8国 14	*	口径16.5 器高4.4 古墻10.4	波打回転へラ削り 器高ナナヂ 古墻ナナヂ 他はヨコナヂ	%	外④ 内③ ⑦	今や 中がみ有り 不良	
第8国 15	*	口径14.9 器高4.7 古墻10.4	波打回転へラ削り 後ナナヂ 古墻ナナヂ 他はヨコナヂ	5%	⑤ ⑦	良好	
第8国 16	钵	口径14.4	ヨコナヂ	5%	④ ⑦	良 口縁部に中が み有り	

1号窯跡II次床出土須恵器

固 形 形 号	器 種	法 量 (cm)	成形調整方法	残存率	色 調 相	調 土	地 成 備 考
第8国 17	直 壺	口径12.6 器高4.1	天井部へラ削り 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良 中がみ有り 内部に土器片 と焼付着	
第8国 18	短颈壺	口径12.4 器高3.8	ヨコナヂ 斜底下部へラ削 り	%	外④ 内④ ⑦	良好 中がみ有り 内部にヨコナヂ と焼付着	
第8国 19	長颈壺	口径6.0 器高17.2	斜底へラ削り 斜底ヨコナヂ	% のみ	外④ 内④ ⑦	中や 良	
第9国 1	环 基	口径15.6 器高3.1	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好	
第9国 2	*	口径17.8 器高4.9	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好 外面に白色 釉	中がみ有り
第9国 3	*	口径17.7 器高2.5	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好 外面に白色 釉	中がみ有り
第9国 4	*	口径17.8 器高3.0	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好 外面に白色 釉	中がみ有り
第9国 5	*	口径17.1 器高3.4	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好 のみ	
第9国 6	*	口径17.4 器高3.0	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好 外面に白色 釉	中がみ有り
第9国 7	*	口径16.7 器高3.0	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好	
第9国 8	*	口径16.1 器高2.7	外側に焼付着のた め不平 内面ヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好 外面に白色 釉	中がみ有り
第9国 9	*	口径16.7 器高3.3	天井部へラ削り 内面中央ナフツ 他はヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好 外面に白色 釉	中がみ有り
第9国 10	*	口径16.2 器高2.6	切り離し痕ナナヂ 他ヨコナヂ	%	外④ 内④ ⑦	良好 外面に白色 釉	中がみ有り
第9国 11	*	口径16.2 器高2.9	天井部へラ削り 他ヨコナヂ	% ⑦	外④ 内④ ⑦	良好 外面に白色 釉	中がみ有り

器 皿 番 号	器 種 名	基 準 量 (cm)	成形調整技法	残存率	色 調 土	焼成 度	備 考
第9回 12	手 盆	口径17.0 基高 2.2	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	⑤ 一部④ ③	良好 良好	外表面に真白 色地付有 ゆがみ有り
第9回 13	* 手盆	口径16.2 基高 3.0	天井部へラ履り 他はヨコナデ	%	(外⑤) 内④ 部③	良好 良好	外表面に真白 色地付有 ゆがみ有り
第9回 14	* 手盆	口径16.7 基高 2.9	天井部へラ履り 他はヨコナデ	%	② 良好	良好	外表面に真白 色地付有 ゆがみ有り
第9回 15	* 手盆	口径18.1 基高 2.5	外表面に横付着のた め不明 内面ヨコナデ	%	(外⑥) (内⑤) 部③	良好 良好	外表面に真白色 地と土器片付 着
第9回 16	* 手盆	口径16.7 基高 2.5	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	(外①) (内④) 部②	やや 良	自然地付有 ゆがみ有り
第9回 17	* 手盆	口径17.2 基高 3.0	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ 定形	%	③ 良好	良好	外表面に真白色 地と土器片付 着
第9回 18	* 手盆	口径14.4 基高 2.1	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	① 良	良	外表面に緑色の 自然地付有 ゆがみ有り
第9回 19	* 手盆	口径16.0 基高 3.5	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	(外④) (内③) 部②	良好 良好	外表面に緑色の 自然地付有 ゆがみ有り
第9回 20	* 手盆	口径14.8 基高 3.3	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	定形	(外④) (内③) 部②	良好 良好	外表面に緑色の 自然地付有 ゆがみ有り
第9回 21	* 手盆	口径15.3 基高 3.1	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	① 良好	良好	外表面に一部緑 色自然地付有 ゆがみ有り
第9回 22	* 手盆	口径15.4 基高 3.3	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外④) (内③) 部②	良好 良好	外表面に一部緑 色自然地付有 ゆがみ有り
第9回 23	* 手盆	口径15.6 基高 3.8	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	定形	(外④) (内③) 部②	良好 良好	外表面に緑色自 然地付有 ゆがみ有り
第9回 24	* 手盆	口径15.1 基高 3.3	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	(外④) (内③) 部②	良好 良好	外表面に一部緑 色自然地付有 ゆがみ有り
第9回 25	* 手盆	口径15.3 基高 3.8	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	③ 良好	良好	外表面に緑色自 然地付有 ゆがみ有り
第9回 26	* 手盆	口径15.7 基高 3.2	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	④ 良好	良好	外表面に緑色的 自然地付有 ゆがみ有り
第9回 27	* 手盆	口径15.2 基高 4.7	天井部へラ履り 他はヨコナデ	%	(外④) (内③) 部②	良好 良好	外表面に緑色自 然地付有 ゆがみ有り
第9回 28	有台盆	口径14.3 基高 9.0 合径 9.0	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外⑤) (内④) 部③	良	
第9回 29	* 手盆	口径14.7 基高 4.7 合径 9.4	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	① 良	良	外表面と内 部に緑色自 然地付有 ゆがみ有り
第9回 30	* 手盆	口径14.3 基高 4.4 合径 9.0	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	④ 良好	良好	外表面に緑色自 然地付有 ゆがみ有り
第9回 31	* 手盆	口径13.6 基高 4.4 合径 8.4	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	④ 良好	良好	外表面に緑色自 然地付有 ゆがみ有り
第9回 32	* 手盆	口径13.6 基高 4.5 合径 8.0	底部凹削付着のた め不明 内面ヨコナデ	%	④ 良好	良好	外表面に緑色自 然地付有 ゆがみ有り
第9回 33	* 手盆	口径14.6 基高 4.6	体部ヨコナデ	底膨次 の量	① 良	良好	
第10回 1	* 手盆	口径15.0 基高 4.2 合径 9.4	底部凹削し後ナ 子 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外③) (内④) 部③	やや 不良	
第10回 2	* 手盆	口径15.3 基高 3.9 合径 10.4	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外④) (内③) 部③	良 全體にゆがみ 有り	
第10回 3	* 手盆	口径14.8 基高 4.1 合径 10.0	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外⑤) (内④) 部③	良 全體にゆがみ 有り	
第10回 4	* 手盆	口径15.0 基高 4.4 合径 9.8	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外④) (内③) 部③	不良	
第10回 5	無台盆	口径12.0 基高 2.5 合径 7.8	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外③) (内④) 部③	良	
器 皿 番 号	器 種 名	基 準 量 (cm)	成形調整技法	残存率	色 調 土	焼成 度	備 考
第10回 6	瓶	口径12.2 基高 3.6 底径 7.6	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	③ ①	やや 不良	若干ゆがみ有 り
第10回 7	* 瓶	口径12.6 基高 3.2 底径 8.2	底部凹削へクリ 後ナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外⑤) (内①) 部③	良	ゆがみ有り
第10回 8	* 瓶	口径12.7 基高 3.6 底径 8.4	底部凹削へクリ 後からナーベ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	(外⑧) (内②) 部③	やや 不良	
第10回 9	* 瓶	口径13.0 基高 3.5 底径 7.9	底部凹削へクリ 後からナーベ 内面鏡面ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	③ ①	やや 不良	若干ゆがみ有 り
第10回 10	* 瓶	口径12.4 基高 3.8 底径 8.3	底部凹削へクリ 後からナーベ 内面鏡面ナックル 他はヨコナデ	%	② ③	やや 不良	ゆがみ有り
第10回 11	* 瓶	口径12.2 基高 3.7 底径 8.0	底部凹削へクリ 後からナーベ 内面鏡面ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	(外①) (内④) 部③	良	若干ゆがみ有 り
第10回 12	* 瓶	口径14.8 基高 3.5 底径 8.4	底部凹削へクリ 後からナーベ 体部下部に手持ち ヘラ削り 内面鏡面ナックル 他はヨコナデ	%	⑤ ③	良好	内面に幾筋 縦 ゆがみ有り
第10回 13	高 扁	口径14.4 高 2.6	底部下部へ削 り後ヨコナデ 内面中央ナックル 他はヨコナデ	ほぼ 定形	鋼鉄部 鏡以外 (外③) (内③)	良	
第10回 14	瓶	口径21.4 基高 22.7 底径 13.8	鏡部中央以上をモ ル調整ヨコナデ 鏡部外壁平行き 一部ヨリ調整 内面鏡面以上ヨコ ナデ、一部鏡部日 内面鏡面に同心円 形	ほぼ 定形	① ②	良	ゆがみ有り
第10回 15	瓶	口径12.0 基高 22.8 鏡部20.0	鏡部ヨコナデ 鏡部上部カキ目、 下半部叩き印 下部上半ナード、下 部同心円叩き	%	③ ①	良好	外面上部 に緑色自 然地付有 ゆがみ有り
第10回 16	* 瓶	口径16.0 基高 21.8	鏡部上半ナード 内面ヨコナデ	鏡部上 半以上 (外③) (内③) 部③	良	外面上部 に緑色自 然地付有 ゆがみ有り	
第10回 17	* 瓶	口径35.4 高 15.0	鏡部ヨコナデ 鏡部上半にカキ 目調整後吹灰 下半部毛刷調整 背面ヨコナデ	約 のみ%	② ③	良好	外面上部 に緑色自 然地付有 ゆがみ有り 1次張と複合
1号窯跡II 次床出土土器							
第10回 18	甕	口径16.1 基高 14.9 底径17.2	底部ヨコナデ 鏡部上部カキ目、 下半部上部斜面の ため不明 内面下部は崩れ調 整	ほぼ 定形	(外⑤) (内①) 部③	良	ゆがみ有り
1号窯跡II 次床覆土出土須恵器							
第10回 19	* 釜	口径16.1 基高 3.0	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	③ ①	良好	ゆがみ有り
第10回 20	* 釜	口径16.5 基高 3.4	天井部へラ履り 内面中央ナックル 他はヨコナデ	%	(外⑤) (内①) 部③	良	ゆがみ有り
第10回 21	有台釜	口径15.2 基高 4.2 合径 9.5	底部凹削へクリ 後ナデ 内面ヨコナデ	%	④ ③	良	
第10回 22	釜	口径15.1 基高 4.0	底部凹削へクリ 後ナデ 内面ヨコナデ	%	④ ③	良好	
第10回 23	短腰甕	口径16.8 高 10.0	鏡部上位にカキ 目調整 鏡部内面に同心円 形	%	④ ①	良好	

1号窓跡前部出土須恵器

器 物 名	形 状 (cm)	形 状 (cm)	主 要 部 位	主 要 部 位 調 査 法	種 類	色 調	質 土	地 成	備 考
1 环 置	径16.8 高2.6	径16.8 高2.6	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④	良好			
2 口 直	口徑17.0 高3.3	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④	良好				
3 口 直	口徑22.2 高8.6	天部へ4段 内面平干ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④	良好	外面上に自然 輪付着			
4 有 口 直	口徑14.0 高5.2 口径8.6	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④	良好	外面上に緑色 自然輪付着			
5 有 口 直	口徑14.5 高5.1 口径8.5	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④	良好	外面上に緑色 自然輪付着 ゆきみ有り			
6 有 口 直	口徑14.8 高4.7 口径8.8	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④	良好	外面上に緑色 自然輪付着 ゆきみ有り			
7 有 口 刷	口徑14.5 高4.3 口径9.2	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④	良好	外面上に緑色 自然輪付着			
8 有 口 刷	口徑14.4 高4.1 口径8.6	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④	良好	外面上に「X」 のヘラ記号有り ゆきみ有り			
9 有 口 刷	口徑15.4 高3.8 口径10.6	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	良好				
10 有 口 刷	口徑15.2 高3.9 口径9.5	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	良好	ゆきみ有り			
11 有 口 刷	口徑15.9 高4.2 口径9.7	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	良好				
12 有 口 刷	口徑16.0 高4.8 口径11.1	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	良好	外面上に自然 輪付着			
13 有 口 直	口徑19.1 高4.6 口径11.7	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	良好				
14 有 口 直	口徑11.1 高?	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	不良				
15 有 口 直	口徑12.8 高3.6 口径7.4	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	中中 不良				
16 有 口 直	口徑13.4 高3.2 口径9.4	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	中中 良				
17 有 口 直	口徑15.2 高5.8 口径9.5	天部へ4段 内面下端へ横方向 のヘラ附?	%	⑤ ④ ③	良好				
18 有 口 直	口徑14.3 高5.5 口径9.4	天部へ4段 内面下端へ横方向 のヘラ附?	%	⑤ ④ ③	良好				
19 有 口 直	口徑13.4 高4.8	天部へ4段 内面下端へ横方向 のヘラ附?	%	⑤ ④ ③	良好	外面上に自然 輪付着			
20 有 口 直	口徑16.8	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	⑤ ④ ③	良好				
21 有 口 直	口徑13.8 高11.3	天部へ4段 内面下端へ横方向 のヘラ附?	%	⑤ ④ ③	良好				

器 物 名	形 状 (cm)	主 要 部 位	主 要 部 位 調 査 法	堆 積 率	調 整 方 法	地 成	備 考
111回 1 後 直	口径17.2 高4.5	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	若干ゆきみ有 り	
111回 2 止口板	口径16.0	全面ヨコナデ 内面中央に2条の 沈縫を施す	%	④ ③ ①	良好	外面上に自然 輪付着と 砂粒付着 若干ゆきみ	
111回 3 長縦瓶	肩径16.8	全面ヨコナデ 内面肩部下部に 2条の沈縫を施す	%	④ ③ ②	良好		
111回 4 新切盤	口径12.0 底径19.6	全面ヨコナデ 内面肩部下部に 2条の沈縫を施す	%	④ ③ ①	良好	外面上及び内面 の一部に自然 輪付着	
111回 5 補	口径14.2 脚径20.6	口縁部ヨコナデ 脚部外面平行印 きとキリ調整 脚部内面同心印 きとヨコナデ	%	④ ③ ①	良好	外面上と脚部 内面の一部に 自然輪付着 若干ゆきみ	
111回 6 補	口径14.5 脚径20.5	口縁部ヨコナデ 脚部外面平行印 きとキリ調整 脚部内面同心印 きとヨコナデ	%	④ ③ ①	良好	外面上及び内面 の一部に自然 輪付着 若干ゆきみ	
111回 7 補	口径14.5 脚径20.5	口縁部ヨコナデ 脚部外面平行印 きとキリ調整 脚部内面同心印 きとヨコナデ	%	④ ③ ①	良好	外面上及び内面 の一部に自然 輪付着 若干ゆきみ	
111回 8 補	口径14.0 脚径20.5	口縁部ヨコナデ 脚部外面平行印 きとキリ調整 脚部内面同心印 きとヨコナデ	%	④ ③ ①	良好	外面上及び内面 の一部に自然 輪付着 若干ゆきみ	
111回 9 補	口径22.1 脚径22.6	口縁部ヨコナデ 脚部外面平行印 きとキリ調整 脚部内面同心印 きとヨコナデ	%	④ ③ ①	良好		
111回 10 補	口径23.0 脚径40.3	口縁部ヨコナデ 脚部外面平行印 きとキリ調整及 びグレードを施す 脚部内面同心印 きと下方で平行印 き	%	④ ③ ① ②	中中 良	ゆきみ有り	
111回 11 補	口径23.6 脚径42.6	口縁部ヨコナデ 脚部外面平行印 きとキリ調整及 びグレードを施す 脚部内面同心印 きと下方のひら 印	%	④ ③ ① ②	中中 良	ゆきみ有り	

1号窓跡灰原出土須恵器

器 物 名	形 状 (cm)	主 要 部 位	主 要 部 位 調 査 法	堆 積 率	調 整 方 法	地 成	備 考
111回 1 环 置	口径16.1	底部は取り付け にあつて作成。 外面上下端を体 部下方まで削す 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	内面に自然 輪付着	
111回 2 环 置	口径14.0	底部は取り付け にあつて作成。 外面上下端を体 部下方まで削す 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	内面に自然 輪付着と 砂粒付着 若干ゆきみ	
111回 3 环 置	口径16.4	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	若干ゆきみ有 り	
111回 4 环 置	口径17.6	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	不良		
111回 5 环 置	口径16.3	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	若干ゆきみ有 り	
111回 6 环 置	口径16.5	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	内面に自然 輪付着と 砂粒付着 若干ゆきみ有 り	
111回 7 环 置	口径16.6	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	内面に砂粒付 着	
111回 8 环 置	口径16.9	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	外面上に若干の 自然輪付着と 土器付着	
111回 9 环 置	口径17.2	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	内面に自然 輪付着	
111回 10 环 置	口径17.6	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	外面上に自然 輪付着	
111回 11 环 置	口径17.7	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	外面上に自然 輪付着と 砂粒付着 若干ゆきみ有 り	
111回 12 环 置	口径15.3	天部へ4段 内面中央ナツツケ 地はヨコナデ	%	④ ③ ②	良好	若干ゆきみ有 り	

固 定 場 所	器 械	法 規 (cm)	成形調整方法	残存率	色 調 整	成 形	備 考
第1308 13	环 锯	口径17.0 锯高3.0	内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良	ゆかみ有り 良	
第1309 14	"	口径16.4 锯高2.5	内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良	外間に隙材 有り	
第1310 15	"	口径17.0 锯高2.1	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良 良	大きめゆがみ 有り	
第1311 16	"	口径16.2 锯高2.5	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	やや 良	大きめゆがみ 及びねじれ 有り	
第1312 17	"	口径17.0 锯高1.7	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良 良	外間に自然輪 有り ゆかみ有り	
第1313 18	"	口径17.1 锯高2.9	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良 良	外間に全般に 自然輪付有り	
第1314 19	"	口径16.5 锯高3.0	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良	内面中央ナットケ 他はヨコナナ	
第1315 20	"	口径16.0 锯高2.6	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良 良		
第1316 21	"	口径16.2 锯高1.8	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良	若干ゆがみ有 り	
第1317 22	"	口径16.4 锯高2.8	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良		
第1318 23	"	口径15.0 锯高1.8	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良	内面一面に自 然輪付有り	
第1319 24	"	口径15.4 锯高2.5	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良	内面中央ナットケ 他はヨコナナ	
第1320 25	"	口径16.0 锯高3.0	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良	外間に緑色自 然輪付有り	
第1321 26	"	口径17.4 锯高1.7	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	やや 良	外間に一部自 然輪付有り ゆがみ有り	
第1322 27	"	口径15.4 锯高3.5	外面調節不明 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良	外間に緑色自 然輪付有り 付有り	
第1323 1	"	口径16.6 锯高3.8	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良	外間に緑色自 然輪付有り	
第1324 2	"	口径15.1 锯高3.9	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良	外間に緑色自 然輪付有り	
第1325 3	"	口径15.8 锯高3.7	大舟鋸へラ削り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良	外間に緑色自 然輪付有り	
第1326 4	有合环	口径15.0 锯高4.1 台径10.1	成形回転へラ切り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤)	良好 良	外間に自然輪 付有り	
第1327 5	"	口径14.9 锯高4.1 台径9.5	成形回転へラ切り 後ヨコナ	% (外④ 内⑤ ①)	良好 良	外間に灰 かぶり	
第1328 6	"	口径15.8 锯高4.4 台径9.9	成形回転へラ切り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤ ①)	良	自然輪付有 り	
第1329 7	"	口径14.9 锯高4.0 台径9.4	成形回転へラ切り 後ヨコナ	% (外④ 内⑤ ①)	良		
第1330 8	"	口径14.8 锯高4.1 台径9.2	成形回転へラ切り 後丁字ナット	% (外④ 内⑤ ②)	良		
第1331 9	"	口径15.8 锯高4.0 台径9.5	成形回転へラ切り 内面中央ナットケ 他はヨコナナ	% (外④ 内⑤ ②)	良	外間に緑色自 然輪付有り ゆがみ有り 画面に「X」 のヘラ記号	
第1332 10	"	口径15.7 锯高4.5 台径10.6	成形回転へラ切り 後ナット	% (外④ 内⑤ ③)	良		
第1333 11	"	口径14.8 锯高4.1 台径9.1	成形回転へラ切り 後ヨコナ	% (外④ 内⑤ ③)	良	内外間にヘラ 記号らしきもの 有り	
第1334 12	"	口径15.6 锯高4.4 台径9.5	成形回転へラ切り 後丁字ナット	% (外④ 内⑤ ③)	良	内面中央ナットケ 他はヨコナナ	

試験番号	器種	法	量 (cm)	成形調整方法	残存率	色 調 節	度	備考
第1568 12	有白环	口徑15.0 基高3.9 合径7.8	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内② 合④)	良	若干のガム		
第1569 13	"	口徑14.9 基高4.0 合径9.5	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑥ 内③ 合⑤)	良好	少がみ有り		
第1570 14	"	口徑15.2 基高4.2 合径10.2	成形切り離し後未 調整	% (外⑤ 内③ 合④)	良好	若干のガム		
第1568 15	"	口徑16.0 基高4.0 合径10.2	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良好	若干のガム		
第1568 16	"	口徑15.8 基高4.1 合径9.5	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良好	若干のガム		
第1568 17	"	口徑15.8 基高4.8 合径10.4	成形切り離し後粗 略ナジ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良好	外側の一端 に緑色自然相 付着 底面にヘラ記 号有り		
第1568 18	"	口徑15.0 基高4.5 合径9.2	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良好	若干のガム		
第1568 19	"	口徑15.2 基高4.8 合径7.4	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	中や 不良			
第1568 20	"	口徑14.9 基高4.6 合径9.6	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良好	内外面に緑色 自然相付着		
第1568 21	無白环	口徑13.2 基高4.4 底径7.4	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	ほぼ (外⑤ 内③ 合④)	中や 良好	若干のガム		
第1568 22	"	口徑13.1 基高4.3 底径7.7	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	ほぼ (外⑤ 内③ 合④)	中や 良好	若干のガム		
第1568 23	"	口徑15.8 基高5.8 合径30.5	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良	ゆがみ直し 外側全体と内 面に緑色自 然相付着 底面に不整 な凹凸有		
第1668 1	杯	口徑14.7	内外面ヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良	若干のガム	内側に自然 相付着	
第1668 2	「フ」杯	口徑20.0	内外面ヨコナデ 外側に一端を3 毛削り、その底面 を側面に沿って 削除する成形方 法	% (外⑥ 内③ 合④)	良	口縁部外側 の(フ)のスラ ン支え有り	口縁部外側 に自然相 付着	
第1668 3	"	口徑15.0	外側に成形して再 整復ヨコナデ後ナ ギ部位に成形 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良	少がみ有り	内側に自然 相付着	
第1668 4	下リ杯	底径7.0	成形し平行線を引 き、中央に穴開 きの位置を確定 し、その周囲にナ ギの削除を施す	底部の 穴% (外① 内③ 合④)	良			
第1668 5	杯	底径6.4	内面とも同心円 引き後ナギ	(外④ 内③ 合④)	良好			
第1668 6	深鉢	口徑10.0 基高1.7 合径21.5 底径10.0	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外⑤ 内③ 合④)	良	内外面に自然 相付着 ゆがみ直し		
第1668 7	"	口徑17.6	割部下半へ削り 他はヨコナデ 割部に2つの孔	口縁部 (外⑤ 内③ 合④)	良好	若干のガム		

試験番号	器種	法	量 (cm)	成形調整方法	残存率	色 調 節	度	備考
第1668 8	淨瓶	口徑12.4	底面に1条の芯棒 他はヨコナデ	網脚下 半以下 を欠損 するも	① ③	良	外側及び内面 の一端に自然 相付着	
第1668 9	瓶	口徑12.0	口縁部ヨコナデ 網脚表面に平行印 き、内面に同心円 印記後ヨコナデ	網脚下 半位迄	② ③	良	自然相付着	
第1668 10	短瓶	側面18.0	口縁部ヨコナデ 網脚表面に平行印 き、内面に同心円 印記後ヨコナデ	網脚上 半位迄	④ ⑤	良	内側と底部外 面に自然相付 着	
第1668 11	"	口徑30.0 網脚39.4 基高37.7	口縁部ヨコナデ 網脚表面は平行印 き後半位付近カキ 目調整、内面は同 心円印記後半位以 下にナゼル	% (外⑦ 内⑤ 合⑩)	良好	網脚上位内面 に自然相付着 ゆがみ有り		
第1668 12	壺	口徑16.8	口縁部ヨコナデ 網脚表面平行印 き後カキ目調整、 内面に同心円印 記後ナゼル	口縁部 付近場	⑥ ⑤	良	ややゆがみ有 り	
第1668 13	"	口徑13.8	口縁部ヨコナデ 網脚表面平行印 き後カキ目調整、 内面の網脚印記 付近の腰を削り また底面の腰を削 り	網脚上 半以上 % (外④ 内③ 合⑤)	良好	口縁部に自然 相付着		
第1668 14	"	口徑25.8	口縁部ヨコナデ 網脚表面平行印 き後カキ目調整、 内面に同心円印 記	網脚上 位以上 % (外⑤ 内③ 合⑦)	良好			
第1668 15	"	口徑24.0	口縁部ヨコナデ 網脚表面平行印 き後カキ目調整、 内面に同心円印 記後ナゼル	網脚上 位以上 % (外④ 内③ 合⑤)	良好			
第1668 16	"	口徑23.6	口縁部ヨコナデ 網脚表面平行印 き後カキ目調整、 内面に同心円印 記	網脚上 位以上 % (外④ 内③ 合⑤)	良好			
第1668 17	"	口徑20.0 網脚35.0	口縁部ヨコナデ 網脚表面平行印 き後カキ目調整、 一部をキズ付、 一部をキズ付、 内面に同心円印 記	網脚中 位以上 % (外⑤ 内③ 合⑦)	良好	外側と内面口 縁部に自然相 付着 ゆがみ有り		
第1668 18	"	口徑23.2 網脚41.0	口縁部ヨコナデ 網脚表面平行印 き後カキ目調整、 一部をキズ付、 内面に同心円印 記	網脚中 位以上 % (外④ 内③ 合⑤)	良好	外側に自然相 付着		

2号窓跡床面出土土器

試験番号	器種	法	量 (cm)	成形調整方法	残存率	色 調 節	度	備考
第1718 1	無白环	口徑15.0 網脚12 基高16.0	内外全体とも網脚が 著しく調整不良	% (外④ 内③ 合⑤)	良好	内側と外側 色差有		
第1718 2	杯	口徑13.3	内外全体とも網脚方 向への腰き裂調整	口縁部 半位% (外④ 内③ 合⑤)	良好	内側と外側 色差有		
第1718 3	杯	口徑16.6 基高3.5	天井部へラ履り 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外④ 内③ 合⑤)	良好	内側と外側 色差有		
第1718 4	有白环	口徑15.8 基高4.1 底径8.6	成形切り離し後ナ ギ 内面ナジタツケ 他はヨコナデ	% (外④ 内③ 合⑤)	良好	ゆがみ有り 外側に幾筋 擦痕		

第5章 考 察

南加賀古窯跡群における8世紀前半の須恵器

1.はじめに

南加賀古窯跡群は5世紀末ないしは6世紀初頭に生産活動を開始すると考えられている窯跡群で、6世紀終末から7世紀初頭に窯場を分散・拡大し、第1回目の当窯跡群拡大期を迎える。そして、ここで取り扱う8世紀前半に、新たに、「戸津のオオダニ」の周辺と平野に面する矢田野地区を加えて生産規模を拡大する。この時期は南加賀古窯跡群存続期間の中で、最も窯場を拡大し、7世紀代に比べて窯跡数を激増させ、当窯跡群の全盛期として位置付けられる。しかし、この窯場の拡大と生産規模は8世紀後半には早くも窯場を収束させ、生産規模を減少させている。この短期間に営まれた窯跡は現在確認されているものだけで、17基を数え、発掘調査された該期の窯跡は、戸津オオダニ地区で戸津24・28・46・62号窯跡の4基と二ッ梨一貫山1・2号窯跡の2基、二ッ梨オオダニ地区で二ッ梨東山2号窯跡、三湖台に面する矢田野地区で矢田野向山1号窯跡、動橋川流域の那谷地区で桃の木山1号窯跡の計9基にも上る。今回はこの豊富な資料をもとに8世紀前半の須恵器編年を試みてみたい。

2.編年案

さて、8世紀前半の加賀地方の須恵器編年については、これまで吉岡康暢氏の行った2期区分を踏襲して行われ、それぞれ平城Ⅰ期と平城Ⅱ期に対応させている。西暦700年を前後する時期（平城Ⅰ期併行）には無返蓋+有台坏と無台坏に須恵器食膳具が統一されることはこれまでの編年観にはば異論のないことであるが、それ以後については坏類の形態変化により1～3期に編年可能と思われる。

編年序列は、出土量が多く、形態的な変遷が比較的明瞭に見られる坏類等の食膳具を主体として試みた。1期は有返蓋+無台坏のセットが消滅し、無返蓋+有台坏と無台坏の食膳具セットが成立する段階で、前代の飛鳥Ⅳ期にみられた様相を残す。2期は飛鳥Ⅳ期の様相から脱して器形が定型化する段階であるが、偏平な器形の坏類が出現するなど退化傾向がみられてくる段階である。3期は2期でみられた偏平な器形の坏類に統一される段階で、この段階をもって偏平な器形の坏類はほぼ消滅する。この3期区分を前提に、各期の様相を以下に述べる。

(1) 1期

桃の木山1号窯跡の資料を標式とする。この窯跡は本文でも述べたように、床の層位関係からI次床とII次床に分けられ、その前後関係も明白である。I次床を1期の前に、II次床を後半に位置付ける。

桃の木山1号窯跡I次床（前半期）

I次床の有台坏は口径14.5～16.5cmを測り、径高指数が32前後の深身のもの（Aタイプ）と27前後の浅身のもの（Bタイプ）とが存在する。Aタイプは高台が高く、しっかりとした作りをしており、古い様相をもつ。高台の付く位置は、A・Bともに体部立ち上がり部分よりも内側にあり、口径・台径比が63程度にまとまる。高台の形態は一般的にしっかりとした作りのものが多く、高いものが目立つ。坏蓋はやや幅広の平坦部を天井にもち、この部分にヘラ削りが

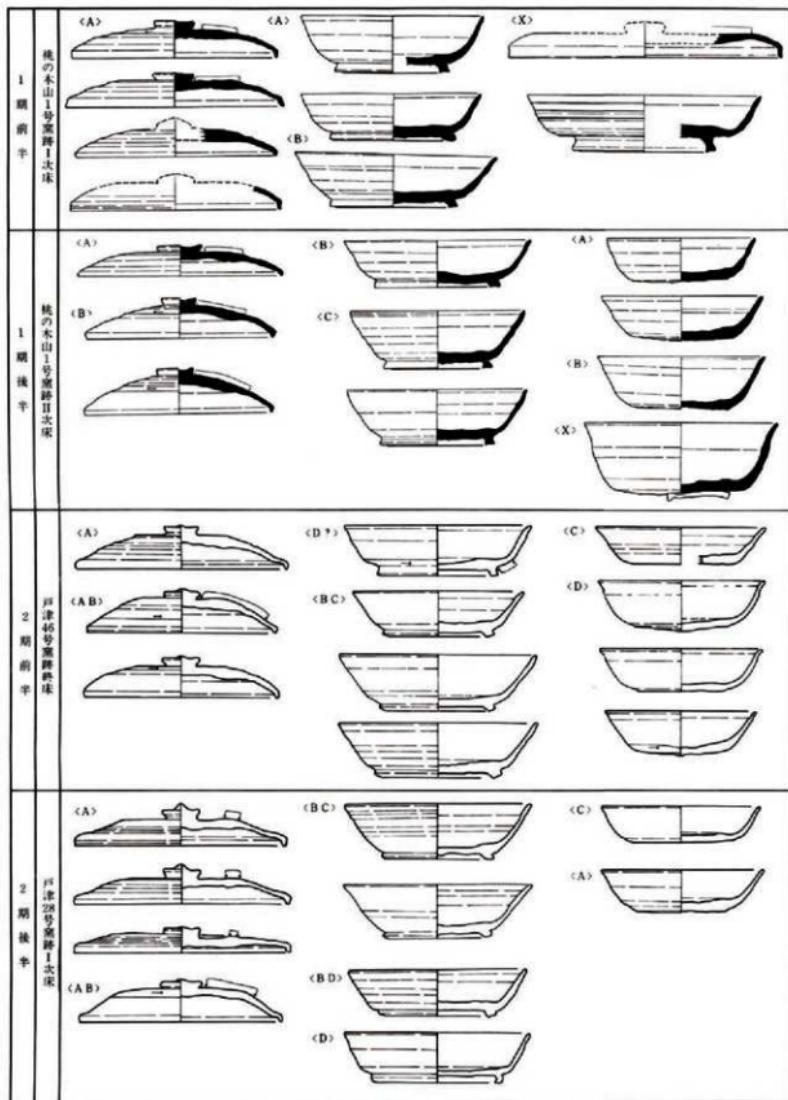
施される。口縁部は器肉が薄く、端部で長く折り返す、シャープな作りのものが目立つ。鉢の形態は偏平な宝珠形で中央が若干突出する。また、これら一般的な法量のほかに、口径が19cm台の大型品（Xタイプ）も一点だけ存在する。これは前底部出土の製品であるが、形態からⅠ次床に入れて差し支えないものと考える。

以上の土器群は、飛鳥一期に位置付けられる黒瀬2号窯跡や能美窯跡群の湯屋窯跡A支群の土器群に幾つかの共通点が見られる。湯屋窯跡A支群の土器群特に無返蓋+有台坏について木立氏が述べられた様相を抜粋してみれば、「坏蓋Bは、ほとんどが偏平で大形のつまみに変化している。口縁端部の形態には多様性がみられる。…………高台は著しく退化し、太く低いものになっているが、依然としてよくふんばった古い様相を残している」（木立1985）とあり、この段階の土器群に極めて似た様相を呈している。しかし、この窯跡で一定量見られた深身のAタイプは桃の木山1号窯跡Ⅰ次床では少量しか存在していないことや湯屋窯跡A支群には有返蓋+無台坏のセットが一定量存在していることは、確実な時間の流れを感じさせるものであり、型式を画する。また、黒瀬2号窯跡では口径が19cm台の有台坏が出土しており（北村・木立1987）、当段階のものによく似ている。この法量のあり方について、北野氏は「4様式（飛鳥IV期）にはⅠ（18~20cm）が一定量生産されるのを特徴とする」（北野1988）としており、飛鳥IV期を特徴付ける法量であるとしている。このように当期の様相は飛鳥IV期の無返蓋+有台坏の様相に極めて近いものであり、飛鳥IV期の直後、有返蓋+無台坏の消滅する平城Ⅰ期の中でも最も古い段階として位置付けられる。

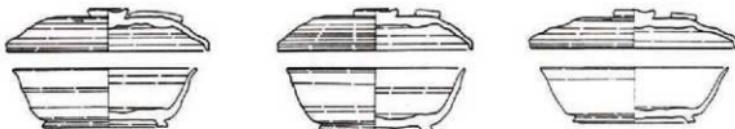
桃の木山1号窯跡Ⅱ次床（後半期）

Ⅱ次床はⅠ次床の系譜を引く形態のもの（蓋A・有台坏B）と系譜の異なる形態のもの（蓋B・有台坏C）が存在する。前者の土器群について述べれば、有台坏Bは口径や径高指数でⅠ次床と大差ない数値を示すが、Ⅰ次床で少量見られた深身のタイプは見られなくなり、高台の付く位置がやや外側になる傾向をもつ。しかし、高台の形態は高いものは見られなくなるものの、まだ、しっかりととした作りをしており、接地面が平坦であるものが一般的である。これに伴う坏蓋は口縁端部の折り返しが短くなつて丸味をもち、Ⅰ次床で見られたシャープな作りのものから退化している状況が看取できる。また、この系譜上で考えられる無台坏に関しては、径高指数が28前にまとまり、やや深身のAタイプとこれよりも径高指数を高くもつ33程度の深身のBタイプも存在する。このBタイプは塊として扱われる可能性をもち、器種の上からも分けられるものかもしれない。以上の土器群はⅠ次床よりも確実に退化しており、後出の段階として位置付けられるものだが、まだ、飛鳥IV期の様相を引きずっており、Ⅰ次床と同型式内に入るものと考える。

上記の土器群に対して、これと共存して系譜を異にする蓋B・有台坏Cが存在している。その系譜については本文で述べているため、ここでは割愛するが、この形態の有台坏に近似した様相を示す窯跡に二ッ梨東山2号窯跡（望月・宮下1990）がある。この窯跡は焼成中または焼出し時に窯体の崩落した可能性が強く、床面に生焼け状態で蓋坏等が取り残されていた。この有台坏は全体的に器高が高く、体部立ち上がりの丸い、塊状の器形をしている。口径は14~15cmに中心をもち、径高指数33前後の塊形の器形のものと径高指数29前後の坏形の器形のものに分けられる。高台はしっかりととした踏ん張る形態を呈し、貼付位置が体部立ち上がり箇所よりもやや内側に入る。これはⅡ次床のCタイプと極めて似た数値を示し、これとセットとなる坏蓋は天井部に幅広の平坦部をもち、口縁端部をやや長く薄く外反して折り返すシャープな作り



第23図 領患器編年図(1) (S=1/4)



第24図 ニッカ東山2号窯跡出土須恵器 (S = 1/4) (望月・宮下1990より転載)

もので、I次床の坏蓋によく似た様相を示す。しかし、I次床の坏蓋よりは鉢の大きさや口縁部形態でやや後出する傾向をもつが、II次床のそれよりはシャープさが残っており、やや古手の感じを受ける。まとめれば、前半期の設定基準である飛鳥時代の様相を色濃く残す器形(有台坏Aや法量の大きい有台坏X)はこの窯跡では欠落しており、細部形態で確実に前半期よりも後出の様相をもっていると判断し、後半期に位置付ける。

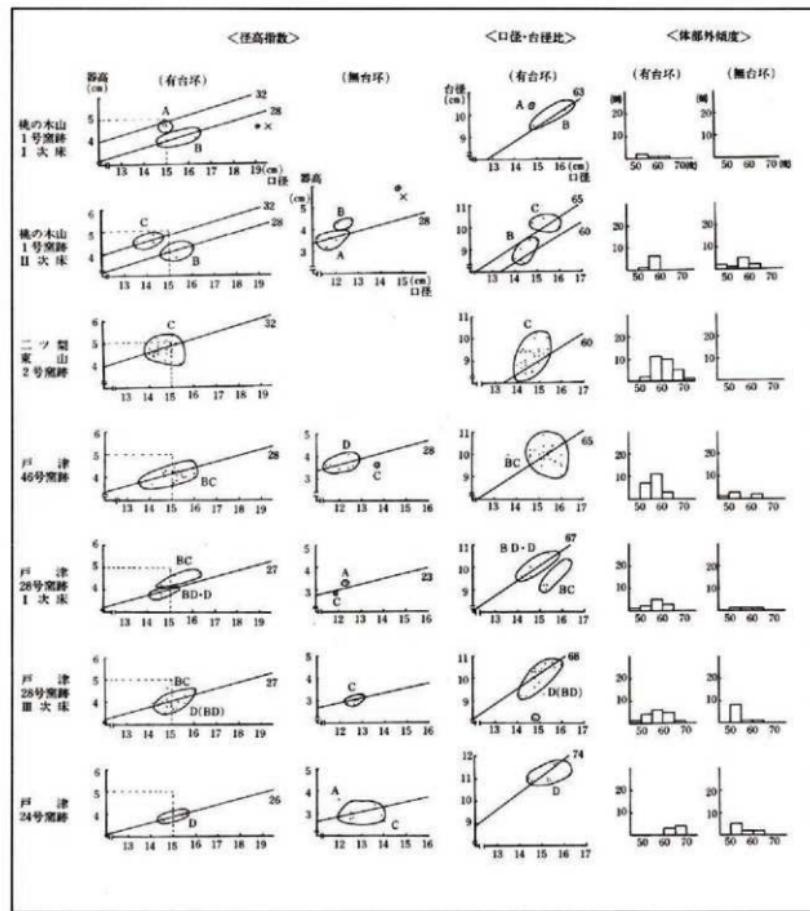
(2) 2期

戸津46号窯跡と戸津28号窯跡を標式とする。戸津46号窯跡を前半期、戸津28号窯跡を後半期に位置付けられる。

戸津46号窯跡（前半期）

昭和59年度に発掘調査した窯跡（望月・櫻田1985）で、最終床面の燃焼部付近から良好な一括資料が得られている。食器群の構成は無返蓋+有台坏と無台坏で前期のものと変わりはないものの、その形態において変化が見られてくる。有台坏は口径が14.5~16cmに中心をもち、径高指数28前後にまとまるもので、1期に見られたAタイプとCタイプの中間的な形態を示している。体部の器形は外傾して開くもので、外傾度も55に中心をもち、Cタイプに近い。高台は貼付位置が体部立ち上がり付近に移行して、厚く短い形態のものを外展させて付ける。以上の形態を一般的とするが、これとは形態的に異なる体部が開かず、高台接地面が平坦な形態(Dタイプ?)が2個体ながら出土している。坏蓋はAタイプの系統と思われる天井部に幅狭の平坦部をもって開くタイプと、AタイプとBタイプの中間的な形態と言える全体的に丸味を帯びるタイプとが存在する。Aタイプはヘラ削りを施さず、ナデのみで仕上げるものが多く、口縁端部を比較的長く折り返す。ABタイプは天井部にヘラ削りを伴うもので、口縁端部の折り返しが短く丸味を帯びる。鉢の形態は両者とも偏平な宝珠形で1期と大きな変化はないが、若干高くなる傾向が見られる。Aタイプは1期の坏蓋の流れを汲むものだが、天井部が狭くなり山笠状の器形を意識したものへと変化している。これに対し、ABタイプはこの時期から新しく登場する器形で、Bタイプの丸味をもつ器形を取り入れて、全体的に器形を丸くしようとする意図が見られる。無台坏は径高指数28前後の深身のタイプで、底部と体部の境が不明瞭な塊状を呈し、口縁部で短く外反させるDタイプが主体をなす。この器形は1期からの系譜では考えられないものであり、何等かの外的な影響によって出現したものであろう。また、1個体だけだが、径高指数24程度のやや浅身のタイプで底部が平坦なものが出土している。以後出現する浅身のCタイプへと変化していくものと考えられる。

これらの土器群と似た様相を示すものに、能美窯跡群の来丸サクラマチ3号窯跡（平田1984）が挙げられる。この窯跡には前段階からの流れを汲むものと東海地方の系譜で考えられるものが共存しており、前者が当窯跡と似た様相を呈している。サクラマチ3号窯跡ではこのように同時に異なる形態のものを生産しており、そこには工人レベルでの何等かの接触があったことは間違いないと思う。この現象は桃の木山1号窯跡II次床においても見られたものであり、こ



第25図 須恵器環類法量分布図(1)

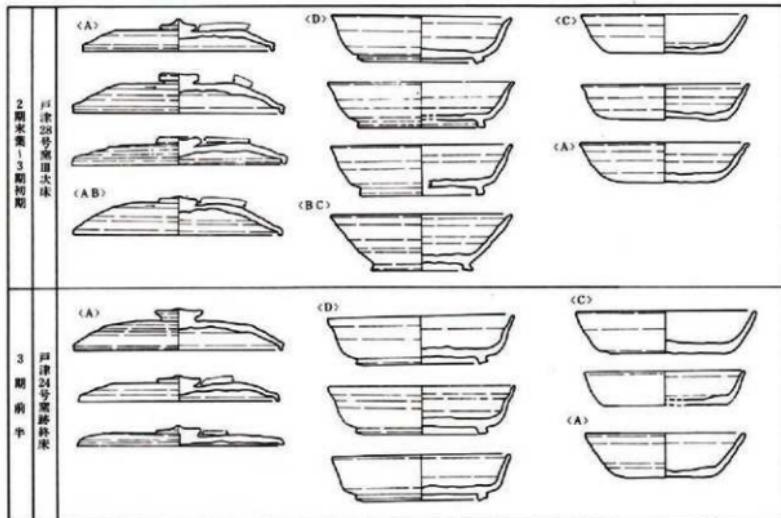
のころに、東海地方特に尾張・美濃地方からの技術的な影響があって、壺蓋にみられる丸味をもった器形など在地の製品も変化して行った（蓋ABタイプや有台环BCタイプなど融合的形態の出現）ものと考えられる。飛鳥IV期から継続してきた形態は、この段階で転換し、外的な影響などによって飛鳥IV期の様相から脱して行ったのではないだろうか。また、この段階は一器種一法量が完成する時期であり、在地色をもなながら、安定期に入つたと考えられる。戸津28号窯跡（後半期）

この窯跡は昭和57年度に発掘調査された窯跡で、床の層位関係からI～III次床に分けられる（小村他1983）。そして、I次床とIII次床では少量ながら一括資料が得られており、その中で

前後関係が看取できる。

(I 次床)

前半期で見られた器形はこの段階になって2系統に別れ、それぞれ発展的に退化している現象が見られる。有台坏については前半期では体部が外傾して開くBCタイプを特徴としていたが、この段階ではBCタイプの系統で体部が一層外傾して変化して行くものと器高が低平化して次の時期に主流となるDタイプに近い形態へと変化して行くもの(BDタイプ)とに分けられる。BCタイプは体部外傾度が50程度に減り、前半期に比べて開く感じで、高台が外展するものから接地が平坦で踏ん張る形態へと変化している。これに対してBDタイプでは高台の形態、体部外傾度では変化は見られないものの、径高指数が26~27に変化し、偏平な器形へと変化している。そして、後者の器形を一層発展させた器形つまりDタイプ(偏平で、体部の立ち上がり部が明瞭に屈曲し、短く直立する高台が付く形態)が一点だけ出土している。このBDタイプやDタイプが以後に継続する形態であり、BCタイプは以後減少する。坏蓋については前半期では全体的に丸味を帯びるABタイプと天井部に平坦部をもつAタイプとがあったわけだが、両者とも変化している。ABタイプは全体的に丸味を帯びる点では前半期と変化はないが、口縁端部折り返しが断面逆三角形状のものから厚手ながらも折り返す形つまりAタイプに近い形態へと変化し、鉢の形態が一層偏平となる。Aタイプは天井の平坦部が幅広となり、その分だけ偏平化し、鉢の形態は中央が突出する器形へと変化する。全体的に作りは粗雑で、口縁端部の折り返しがあつぱったくなる。有台坏と同様、後者が以後に継続する器形である。無台坏では1期にみられた深身のAタイプがこの段階でも存続するものの、器高の低平化と底部の大形化など偏平な器形へと変化している。また、これ以後無台坏の主流の器形となる器肉が薄く、偏平な器形のCタイプが定型化されて出現する。



第26図 須恵器編年図(2) (S=1/4)

以上の土器は前半期からの様相を色濃く残すものと3期へと継続していくものの2系統の土器が存在しており、数量的にはほぼ同じ程度の割合で構成されている。

(Ⅲ次床)

I次床で半数近くを占めていた前半期の様相を色濃く残す土器は、Ⅲ次床では著しく減少し、偏平な器形を呈す蓋Aタイプ、有台坏Dタイプ、無台坏Cタイプが8割以上を占めるようになる。前半期の様相を残す器形はこの段階では占有量の減少だけで、器形上の目立った変化は認められない。これに対し、偏平な器形の土器群についてはI次床のものから変化しながらも偏平な形で定型化してくる。有台坏ではI次床で見られたBDタイプは器高を一層低平にして、量を減らし、1個体だけ見られた部体の立ち上がりが明瞭な器形のDタイプは増産されてくる。また、坏蓋はI次床よりも鉢の高さが低いものへと変化し、上面が平坦なボタン状偏平器形の鉢が出現する。無台坏は口径が13~14cmにまとまり、I次床のものよりも大形化した分だけ偏平となって、径高指数22程度の定型化されたものになる。

戸津28号窯跡の段階は前半期の戸津46号窯跡で見られた土器が2つの系統に別れ、それぞれ器形の偏平化や細部形態の粗雑化という形で、退化している状況が見られる。そして、その2つの系統は一方の器形では前半期の形を守りながら減少・消滅し、一方の器形では前半期からの様相を当初は守りながらも、以後形態を一層変化させながら次の段階の主要器種として成長してゆく。この段階は以上のような2期前半期の様相から3期様相へと転換する過渡的な様相として位置付けられるものであり、I次床からⅢ次床への変化は明瞭である。Ⅲ次床の段階はこの後半期の中でも終末期であり、3期に近い様相をもつ。

(3) 3期

3期は戸津24号窯跡と矢田野向山1号窯跡Ⅲ次窯を指標とする。この期は2期後半の戸津28号窯跡Ⅲ次床で見られた偏平器形のものには統一される段階であるが、その中に新しい器種組成が導入される時期もある。坏類偏平化の終局的様相を呈する戸津24号窯跡を前半期に、偏平器形の衰退傾向が始まる矢田野向山1号窯跡Ⅲ次窯を後半期に位置付ける。

戸津24号窯跡（前半期）

この窯跡は昭和57年度に発掘調査されたもので、床が3枚確認されている（小村1983）。この中で、Ⅲ次床（最終床）で良好な一括資料が得られており、これをもとに当期の様相を述べる。有台坏はすべてDタイプで、口径14.5~16cmを測り、15.5cmに中心をもつ。径高指数は26程度に集中し、2期よりも口径が大きくなった分だけやや偏平になっている。高台の形態は戸津28号窯跡Ⅲ次床で見られたものと大差なく、短く直立する形態と厚く短く外展する形態とが存在する。しかし、高台径は体部の外傾度が増した分だけ大きくなり、口径・台径比が74程度と高くなる。これに伴う坏蓋は資料的に乏しいため、はっきりとは言えないが、口縁端部の著しく微弱なもののが存在することで、戸津28号窯跡Ⅲ次床よりも後出する様相と思われる。無台坏はCタイプが主体で、口径が13~15cmにバラツキ、2期後半に見られなかつた15cm前後のやや大ぶりのものも加わってくる。そして、体部の外傾度も漸移的に増加する傾向が見られる。

また、当期に位置付けられるものとしては矢田野向山1号窯跡Ⅰ次窯（望月・宮下1990）が挙げられる。後半期に位置付けた矢田野向山1号窯跡Ⅲ次窯は、主軸を同じくしてこの窯を改築して作ったものである。有台坏は戸津24号窯跡よりもやや大振りの口径を示し、16cm台に中心をもち、径高指数25前後のDタイプが主体を占める。しかし、体部外傾度は60度台前半を測り、戸津24号窯跡よりも若干聞く傾向にあり、口径・台径比は70前後に多い。高台の形態は豊

付き部が平坦に接地する短く踏ん張るものが多く、戸津28号窯跡Ⅲ次窯のものに近い。壺蓋は大きな偏平宝珠紐をもち、口縁端部を厚手の三角状か外反して折り曲げる。無台壺は口径14cm台に中心をもち、径高指数22前後に分布するCタイプが主体で、偏平で、体部をやや外傾するものが目立つ。これらの様相に関しては戸津24号窯跡に対比してかまわぬが、これら主体的な器形のはかに、天井部が丸く山笠状を呈す壺蓋A Bタイプと器高い深身有台壺B Cタイプ、底部に丸みをもつ無台壺Aタイプが少量ながら一定量存在する。これらの器形は2期の様相を引きするものとして、若干古い様相をもつが、主体的な偏平器形に比べ、1割程度しか存在しておらず、総体的には偏平器形に統一される段階と評価でき、2期後半のものよりも有台壺Dタイプ、無台壺Cタイプが確実に偏平になっていることを重視し、当期に位置付ける。

この時期は有台壺・無台壺において偏平な器形にはば統一されることを特徴とし、2期後半から壺類の口径の大型化に伴う一層の偏平化と体部の直立化の進行に伴う高台径・底径の増加という形で変化する。また、無台壺の占有率が急増し、矢田野向山1号窯跡Ⅰ次窯では蓋壺を凌ぎ、6割程度、戸津62号窯跡ではほぼ同量程度を有する。1期・2期に見られた蓋壺中心の組成はこの期を境に転換し、蓋をもたない器種を中心とした組成へと変化する。また、この時期は上記のような1器種1法量の原則を守る蓋壺・無台壺の須恵器組成と加賀市篠原遺跡（田嶋他1987）に見られるような蓋壺の多器種分化または皿等の新器種を含む多器種須恵器組成が出現・併存し、2重構造を示す。現在のところ窯跡例としては当窯跡群では確認されていないが、ある特定の需要者にのみ供給される器種組成の窯が存在していたものと考えられる。

矢田野向山1号窯跡Ⅲ次窯（後半期）

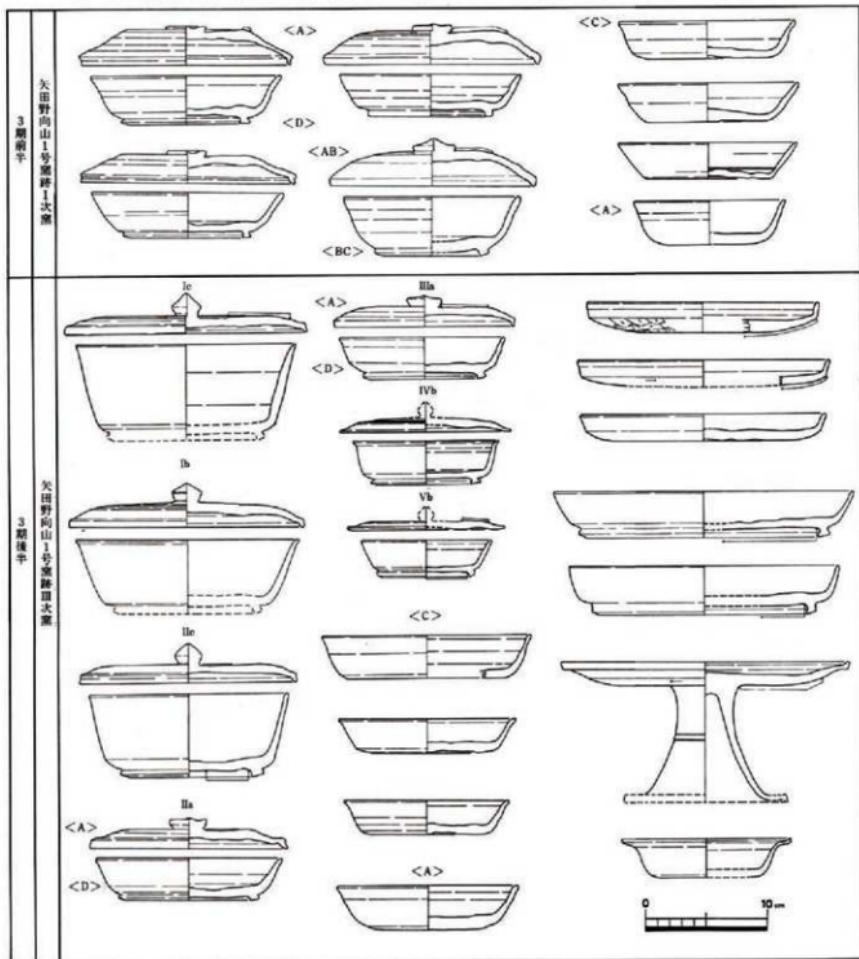
後半期は前半期の偏平器形を一層進展させ、法量の小型化が見られてくる。また、前半期に一部の窯跡で導入され始めた多器種組成が普及され始める段階として位置付けられ、矢田野向山1号窯跡Ⅲ次窯（望月・宮下1990）がそれに該当する。

有台壺はI類（18~19cm）、II類（15~16.5cm）、III類（13~14.5cm）、IV類（12cm前後）、V類（10cm台）の5法量が存在し、I類は径高指数40前後のc類と径高指数28前後のb類、II類は径高指数40前後のc類と径高指数23~24前後のa類、III類は径高指数23~25前後のa類、IV・V類は径高指数28前後のb類にそれぞれ分けられる。前半期から継続する器種はII a類とIII a類であり、II a類はその法量から前半期のD器形をそのまま引き継ぐ器形、III a類は前半期のものから法量をひとまわり小さくして分化した一群として位置付けられる。II a類は前半期よりもさらに偏平となり、II a類・III a類とともに高台の高さを低下させている。これに伴う壺蓋はII a類・III a類ともに偏平宝珠紐を付すが、径を小さくし、やや頂部の盛り上がる形態となり、口縁部の折り返しは薄く折り曲げる比較的シャープな形態を呈す。無台壺も前半期の形態を引き継ぐ器種で、前半期に増加した数量をそのまま引き継ぎ、この段階でも主体的な器種として存在する。器形は前半期に比べ、若干口径を小さくして、さらに偏平となり、口縁部が外反する。

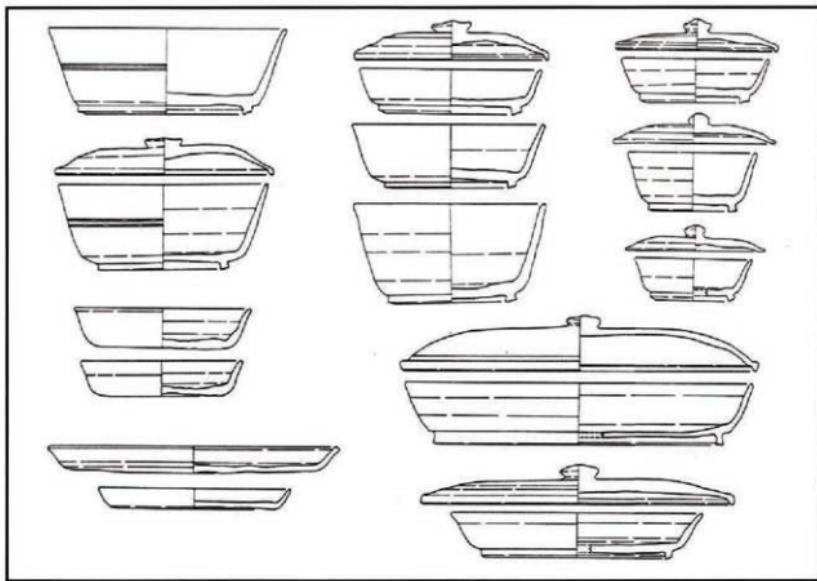
以上の前半期から継続する器種に関しては2期から3期へと変化した壺類偏平化の傾向をそのまま進展させ、全体に口径をひとまわり小さくする。この様相は確実に3期前半に後出するものと評価でき、次の二ッツ梨横川1号窯跡の段階にも引き継がれるが、この期を境として消滅への道をたどる。つまり、当期は8世紀初頭から続く蓋壺・無台壺器種の終末段階として位置付けられるもので、同時にこれ以後主体となる新しい器種の初源的な段階と言える。

さて、新しい器種に関しては先にも述べた蓋壺I c類・I b類・II c類・IV b類・V b類に

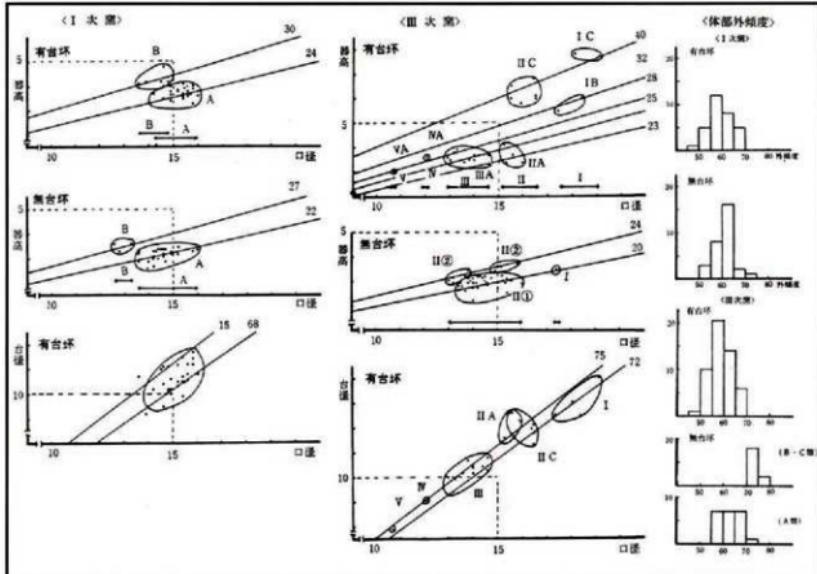
加え、無台皿、有台皿、逆蓋器形高坏等があり、また、蓋坏にはこの時期に顯在化する金属器指向型とも言える体部に沈線をもち、底面をヘラ削り調整するものが存在する。これらの器種は前半期に、先駆けて一部の窯跡に導入された宮都の器種組成が一般的に普及され始めたものと評価できる。前半期のこれらの器種と当段階のものを比較した場合、前半期は、有台坏のI類径高指数が深身で37前後を呈し、径高指数50前後を測る一群が定量存在すること、無台皿に宮都の皿C形態(西1979)的な口縁端部面取り状のものが定量存在し、口径15~22cmの中でいくつかの法量に分けられること、有台皿の口径が21~28cmと大型法量を呈し、蓋を伴うものが



第27図 須恵器編年図3 (S=1/4) (望月・宮下1990を一部改変)



第28図 錦原遺跡7号土坑出土須恵器 ($S = 1/4$) (田崎他1987より転載)



第29図 須恵器基盤 (矢田野向山1号墳跡) 法量分布図 (2) (望月・宮下1990より転載)

存在すること、棲鏡や鉄鉢などの仏具的器種が定量存在することなどに対し、後半期では有台坏I類の深身タイプが40前後とやや深くなり、径高指数50前後のものは僅少となること、無台皿に宮都皿C形態のものは存在せず、底部を粗くヘラ削りする底部の丸い口径13~15cmのものにはば統一されること、有台皿は17~20cm程度と20cmを越える大型品は存在せず、蓋の伴うものは存在しないことなどを特徴とし、前半期から後半期へ宮都的な様相が薄れるとともに、確実に新しい様相をもって来ていることが窺える。前半期のそれが中央からの強いインパクトで導入された感じを受けるのに対し、後半期のそれは前半期の器種組成を在地化させたものと評価でき、次の時期にはその器形を出発点とする新たな器種組成が生まれて行ったと考える。

このように、3期は蓋坏中心の器種組成からそれが崩れ、蓋を伴わない器種に比重を移し、そして、中央から新しく導入された器種組成を在地の中に還元・融合させ、北陸固有（南加賀特有）の器種組成を形成して行ったものと考える。

以上、3期の概要を述べてきたが、これに後続する窯跡としては二ッ梨横川1号窯跡（望月・宮下1989）が挙げられる。この窯跡では3期後半で出現した新器種を主体として器種組成が組まれており、蓋坏は3法量に分けられ、無台皿・有台皿は合わせて4割近くの占有率を示す。矢田野向山1号窯跡 次窯の様相から二ッ梨横川1号窯跡へすぐさま移行するとは思われないが、その間に末窯跡群の浅川3号窯跡（出越1989）的な様相をもつ須恵器が存在し、平城IV期の様相をもつ須恵器へと推移して行きながら、在地的な様相を強めて行ったものと考えたい。

3.まとめ

以上、1~3期の編年序列とその様相を概述してきたわけだが、最後にそれらの曆年代観について考えてみたい。

まず、1期は先にも述べたように、飛鳥IV期の様相を色濃く残しており、前半期は飛鳥IV期の直後、飛鳥V期・平城I期の中でも最も古い段階に位置付けられる。年代観に関しては平城I期が藤原宮の時期（678~710年）をあてることには問題がない（西1976）ことから、1期の上限を700年を前後する年代頃かまたは若干これを遡る年代をあててよいものと考える。3期については、前半期の段階で、偏平器形に統一され、一部の器種組成に平城I期に対応されるような宮都的器種組成が導入されることから、平城II期に対比可能である。しかし、後半期には早くも前半期の様相を在地化させており、その法量の小型化が平城III期的な様相も具備していることから、平城II期から平城III期への過渡期あたりに対比できるものと考える。平城II期の曆年代はS D3035下層出土の木簡等から、その一点を730年頃に置くことが可能とされており（西1976）、平城III期の曆年代がSK2101出土木簡等によって750年頃に位置付けられるところから、総合して3期の曆年代観は8世紀第2四半期頃または第3四半期にかかる頃に比定する。つまり、1期を（7世紀末？）~8世紀第1四半期頃、2期を8世紀第1四半期~第2四半期、3期を8世紀第2四半期~（第3四半期？）の曆年代観が与えられるものと信じる。

註

(1) 吉岡氏は8世紀前半をI期とし、その様相を「須恵器は古墳時代末期の器種・器形が払拭され、…………全体に依然體内に準ずる様相を示す」と概念付けている。そして、前半の標式を春木3号窯跡としてI期に、後半の標式を若緑3号窯跡としてI期に細分し、I期の様相は古墳時代末期に見られた有返蓋+無台身と無返蓋+有台身の基本的な2類型が解消し、無台坏と無返蓋+有台身を基本とする組成が成立するものとして、平城I期に位置付け、I期の様相は坏類の平均的縮小化と深身の大型有台坏が一定の量比を獲得して器形が分化する特徴を提示し、I期の古相が平城II期に対比できるとしている（吉岡1983）。このように、8世紀前半を2期に分け、

- 平城Ⅰ期と平城Ⅱ期に対比する考えは、式様とする窓跡と概念規定に変動はあっても基本的にはその後も受け継がれ、田嶋氏または北野氏によってⅡ期とⅢ期に編年区分されている（田嶋1989、北野1989）。
- (2) 末丸サクラマチ3号窓跡の壺環器形について木立氏は「この段階に新器風・技術をもたらした山笠形の壺蓋は……より広範な地域で一齊に導入されたものと思われ……東海地域の須恵器生産組織と何らかの関係があった可能性が高い」と東海地方との関連性を指摘している（木立1985）。
 - (3) 戸津62号窓跡は壺環の器形から2期の終末から3期前半に位置付けられるもので、窓体内取り残しの製品は少なかったが、壺環と無台环の量は半々程度で、焼台に使用されたものを含めれば、無台环が7割程度を占める（望月1991）。
 - (4) 北野博司氏は藤原遺跡を式様とする土器群を前Ⅲ期と設定し、その内容について「多様な器種分化と法量の規格性が顕著な宮部の組成に準じた内容をもつ」とするが、一方では「Ⅲ期以来の食膳具セットの基本構成を引き継ぎ、組成的に比較的単純な一般集落や窑もあって、組成の2面性は明確化している」と述べられている（北野1989）。
 - (5) ニッカ梨横川1号窓跡の偏平器形環類は、全体では2割程度と低い比率を示し、壺環で口径13~14cm、無台环で口径12~14cmを測り、径高指數を高くしながら、口径を確実に小型化している。矢田野向山1号窓跡Ⅲ次窓までに見られた環類の偏平化はこの段階では消滅化という形で推移して行っている（望月・宮下1989）。

引用文献

- 北野博司 1988 「用途からみた食膳具の組成とその変化」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
 1989 「北陸における須恵器生産」「北陸の古代手工業生産」北陸古代手工業生産史研究会
 木立雅朗 1985 「能美窓跡群の須恵器編年（1）北群」「辰口町湯屋古窓跡」辰口町教育委員会
 北村主弘・木立雅朗 1987 「黒瀬瓦窓跡」「北陸の古代寺院」北陸古瓦研究会
 小村茂也 1963 「戸津」小松市教育委員会
 田嶋明人他 1987 「藤原遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
 田嶋明人 1989 「加賀・能登の古代土器生産」「北陸の古代手工業生産」北陸古代手工業生産史研究会
 西弘海 1976 「平城宮出土土器の編年とその性格」「平城宮発掘調査報告Ⅸ」奈良国立文化財研究所
 1979 「奈良時代の食膳器の部名とその用途」「研究論叢V」奈良国立文化財研究所
 平田天秋 1984 「辰口町末丸サクラマチ窓跡（資料編）」石川県立埋蔵文化財センター
 望月精司・宮下幸夫 1988 「ニッカ梨横川1号窓跡発掘調査報告書」小松市教育委員会
 1990 「ニッカ梨横川古窓跡・矢田野向山古窓跡」小松市教育委員会
 望月精司 横田誠 1988 「戸津-第4・5・5次発掘調査概要報告書」小松市教育委員会
 望月精司 1991 「戸津古窓跡群Ⅰ」小松市教育委員会
 吉岡康輔 1983 「奈良平安時代の土器編年」「東大寺領横江庄遺跡」松任市教育委員会 石川考古学研究会

付記 生産体制とその背景

この考察では8世紀前半の須恵器について、その器形変化を追ってきたが、ここではこの器形変化から見た須恵器生産の在り方について二、三考えてみたいと思う。

まず、須恵器器形の大まかな相続を述べれば、食膳具は700年頃を境として、有蓋無台环は消滅し、有蓋有台环と無蓋無台环に統一される。また、同時に7世紀代にさかの回復した器種内での法量分化は衰退し、1器種1法量の規制をもつて食膳具となる。1器種1法量の食膳具は8世紀前半代に存続し、8世紀後半2四半期頃に導入された新器種によって徐々に崩壊し、その新器種を中心とする器種構成へと変貌を遂げる。大略での器形変化は以上のとおりであるが、その器風にはこの間2つの系統が存在し、その器形変化とともに出現・消滅する。有蓋有台环と無蓋無台环のセットに統一された段階、つまり1期では、7世紀代の様相を残存させるとともに、6・7世紀代の主体的な畿内で準ずる様相が存続する。しかし、1期後半から2期前半、東海地方（特に美濃須須奈）の影響を受けた器形が各窯で単発的に出現し、それとともに7世紀代の様相を払拭して、その東海の器風と畿内の器風を混ぜたような在地特有の器形を作り出す。きっかけは東海地方の影響と判断できるが、その性格は畿内一辺倒の様相から脱し、在地の様相を形成する段階として性格付ける。2期に見られる1器種1法量の固執はこのような在地様相の形成を意味するものと考えられ、2期後半から3期前半へ東海の器風が徐々に流れ、北陸では一般的な畿内の器風が頭化する。

以上のような須恵器器形に見られる畿内・東海の器風の受け入れ、または器種構成の畿内遵守の形は何を意味するのだろうか。社会的な背景または生産組織の在り方からその流れを考えて見たい。

まず、1期以前にある、7世紀後半の様相について考えてみたい。この時代は寺院創建の時期に当たり、南加賀では保賀庵寺・津波庵寺・弓波庵寺・宮地庵寺、北加賀では末松庵寺など多くの寺院が建立されている。この寺院創建には瓦工・木工・仏工などの専門的技術を有した人が中央から派遣されてきたと思われ、瓦から見ても、吉岡氏が「屋瓦様の主流は紀寺式であり、越前を経由することなく畿内方面より直接技術導入が計られて」（吉岡1976）

いると指摘するように、生産組織レベルでの畿内との密接な結び付きを感じる。この瓦生産は能美窯跡群湯屋窯など瓦陶兼業窯というかたちをとっているものが多く、須恵器生産においても瓦とともに、以上のような畿内からの技術導入が計られる可能性が大きいわけである。このような寺院創建という政治的な要因によって、特殊な形での須恵器生産体制があり、須恵器に畿内の様相がストレートに導入されたものと考えたい。このような特殊な場合を除いて、本来の須恵器生産にはどのような形が採られてきたのであろうか。律令制の窯業生産の在り方について、浅香年木氏は多彩軸陶器と瓦はその生産に官営的な要素が存在していたことを指摘しつつも、「須恵器生産に関する限り、その窯跡群が概ね一群一窯群への指向を帯びるところより見て、その生産と交易を支配するものは、郡領層に代表される、それぞれの地域の伝統的な支配勢力であり、通常の場合、ほぼ郡単位の交易権に支えられていた」(浅香1971)と推測している。つまり、在地勢力を支配者として在地の技術者を構成員とする、郡を一単位とした在地の中での須恵器生産として理解できるものであろう。また、若干対象とする時代が古くなるが、共同体の理念を取り入れたものとして、萩本勝氏の考察(萩本1985)がある。氏はその中で、「生産と経営の主体は陶工集団を内に含んだ村落レベルの首長層ではなかろうか」として「焼陶伐薪の山の経営を始め、広く在地の要求に答えるべき陶工集団として、在地における『デミウルギー(村抱え)』の位置付けを考えなくてはならないだらう」という興味深い見解を述べている。このような見解を総合すれば、須恵器生産を掌握していたものは郡領層という中央との結び付きをもった人間であったとしても、直接須恵器を作り上げていた人間はもともと在地にいた村抱え的な技術者であり、その技術者を根本的に取り組む人間もその村の首長的な位置にあったものなのであろう。

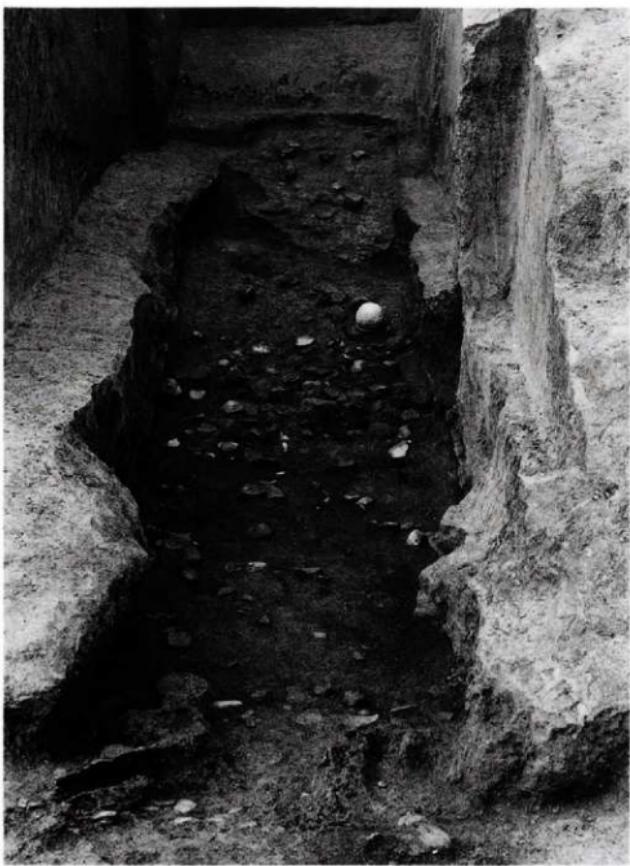
以上のような生産組織の形を前提として考えれば、7世紀後半に顯在化した寺院創建という政治的事象が過ぎ去った西暦700年以後というのは、本来の須恵器生産の形に戻ったものと考えられ、政治的な強制力の弛緩とともに直接須恵器製作にあたる工人に畿内の器風が薄れていったのではなかろうか。また、この段階には窯場の拡大と増産が見られ、新たな須恵器工人の確保とともに一層村に根差した形、つまり「一器種一法量」を特徴とする壺坏や東海地方の作風を取り入れた形態等在地的な色彩をもったかたちでの須恵器生産が行われるようにならう。ただし、この須恵器生産組織のトップに立つのは郡領層であり、在地豪族がこれにあたっていたとしても、律令制の支配機構に組み込まれた「畿内貴族の地方支配に協力する末端官僚の役割をもつもの」(浅香1978)である側面ももっていたわけである。このような状況により、以前にも述べたように器形上では畿内に準ずる形を探るといった基本的な原則は遵守されていたものと考える。

しかし、3期前半に再び7世紀後半で見られたような直接的な畿内からの須恵器様式の導入が見られる。これは越中の流田N016号遺跡1・2号窯跡(上野他1980、山本他1986)でも同様のものが見られ、北陸全般において期を同じくして導入された可能性をもつものであり、何等かの政治的変動に起因するものと思われる。その要因としては律令制の確立と中央集権の強化などを想定したいが、中央でも国分寺造営・大仏開眼に示される律令古代国家の発展がみられ、この時期に宮都でも土器様式にさざなる発展が見られる。平城宮の宮都完成と律令經濟の安定または経済進行は、強い影響力となって地方官に向かって、宮都の多様な器種分化と食器構成を真似て、地方官にいち早く宮都の土器様式が導入されていったものと見られる。

しかし、このような畿内の様相を直接的に受け入れる須恵器様相は長くは続かず、後半の矢田野向山1号窯跡Ⅲ次窯ではすでに宮都の器種組成が在地に遷元され、次の二ッ柴横川1号窯跡や猪宮5号窯跡の段階では、さらに展開して、地色を一層濃くしながら、北陸固有とも言ふべき、須恵器様相を形成している。つまり、この段階は須恵器生産を掌握するトップの位置にあたる郡領層においても、「中央の形に従え」といった基本方針をやや軽視する傾向が出てきた段階として評価でき、そして、この背景には律令制支配の弛緩や荘園制の土地支配の萌芽等社会的な要因が存在したと想定できる。この社会的な変動に伴って、末端官僚としての位置にあたった郡領層に対する中央から支配力を低下したものと考えられ、その郡領層を支配体系のトップに置く須恵器生産組織も中央からの規制が弱まっていたものと考えたい。このような状況により、須恵器生産は一層在地に根差す形となり、郡単位での生産組織を形成すると共に、各窯跡群での地域差の出現など地域に根差したような形での須恵器様相を生み出して行く結果となつたのであろう。

引用文献

- 浅香年木 1971 「平安期の窯業生産をめぐる諸問題」『日本古代手工業史の研究』 法政大学出版局
浅香年木 1978 「第3章第3節 江沼の国造」「加賀市史」通史上巻 加賀市史編纂委員会
上野章他 1980 「小杉流通業務團地内遺跡群-第2次緊急発掘調査概要-」 富山県教育委員会
萩本勝 1985 「山陰東部古墳時代後期の須恵器」「北山茂夫追悼日本史学論集 歴史における政治と民衆」 日本書翰叢書
山本正敏他 1986 「小杉流通業務團地内遺跡群-第6次緊急発掘調査概要-」 富山県教育委員会
吉岡康暢 1976 「平安前期の地方政治と国分寺(上)」「金沢大学日本海域研究所報告」第8号 金沢大学



1号窑跡目次床全景



調査前遠景



調査風景



1号窯跡Ⅱ次床焚口部炭化木材



1号窯跡Ⅱ次床成部土師器甕出土状況



1号窯跡窯体南側地山遺物出土状況



1号窑群Ⅰ次床·Ⅱ次床状况



1号窑群Ⅰ次床全景



1号窑群地成都右Ⅰ次床·Ⅱ次床状况



1号窑群Ⅰ次床前底部积水



1号窑群地成都左Ⅰ次床·Ⅱ次床状况



2号窓跡



1号室跡前部全景 北より



2号土坑



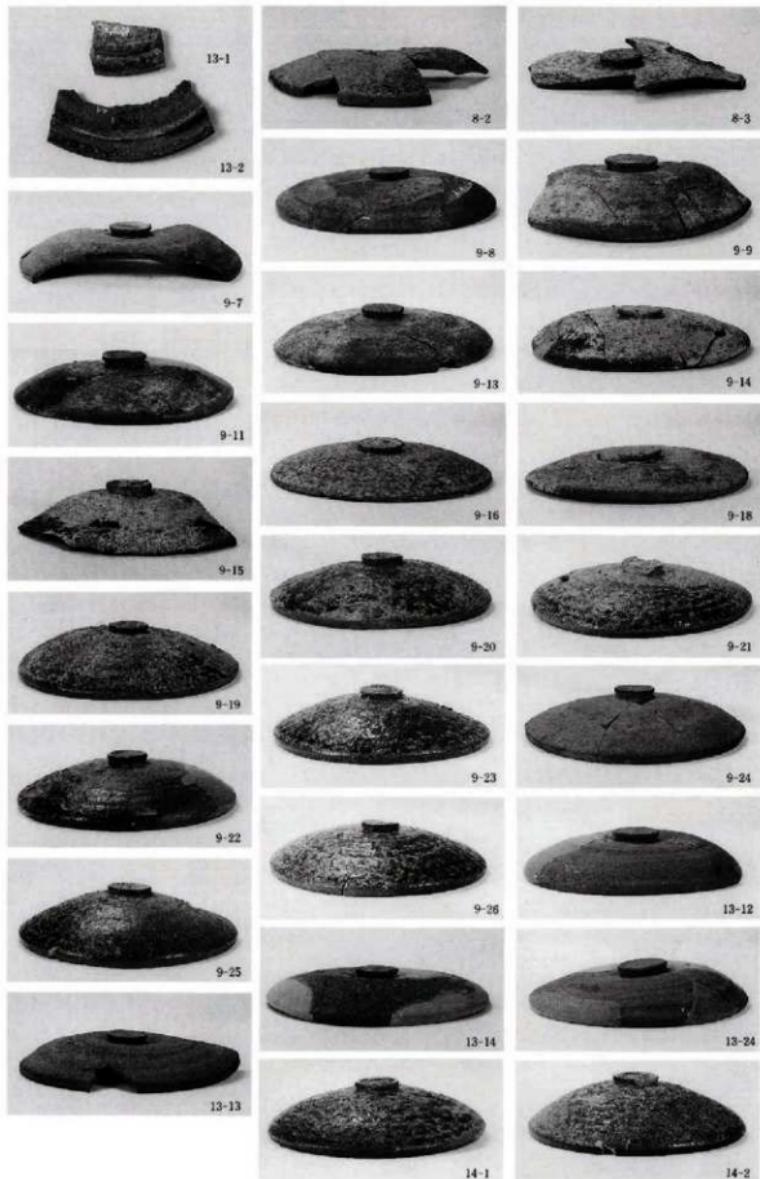
3号土坑

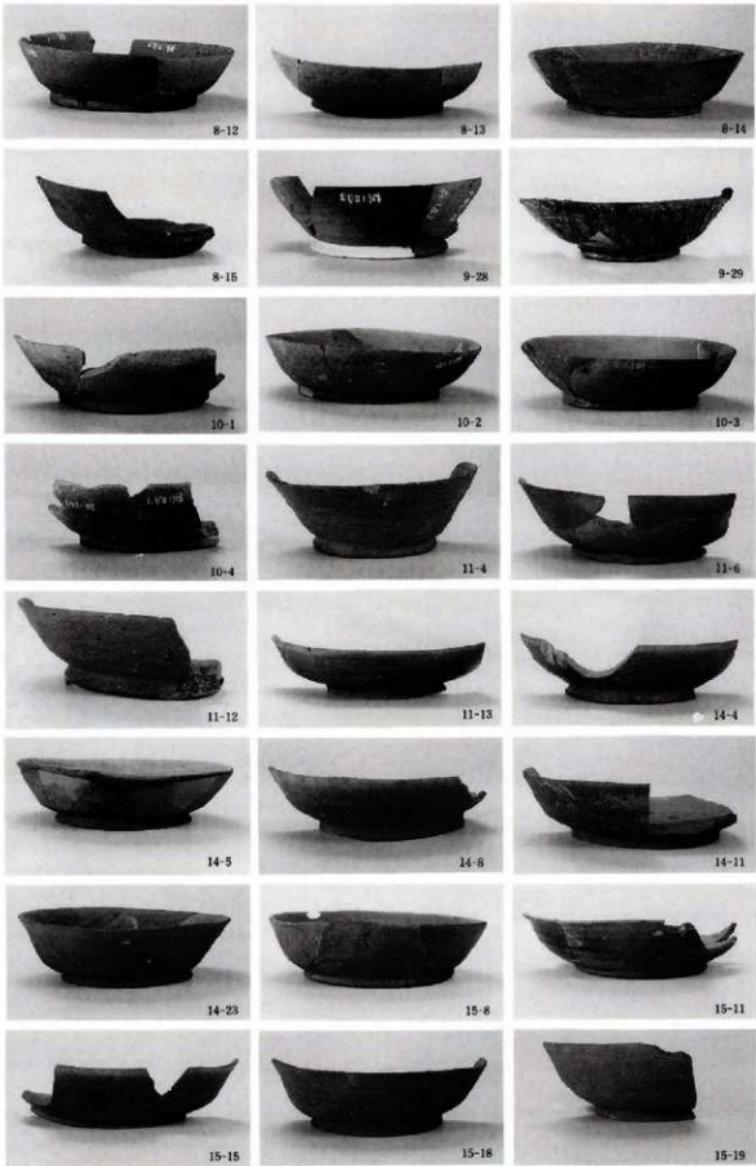


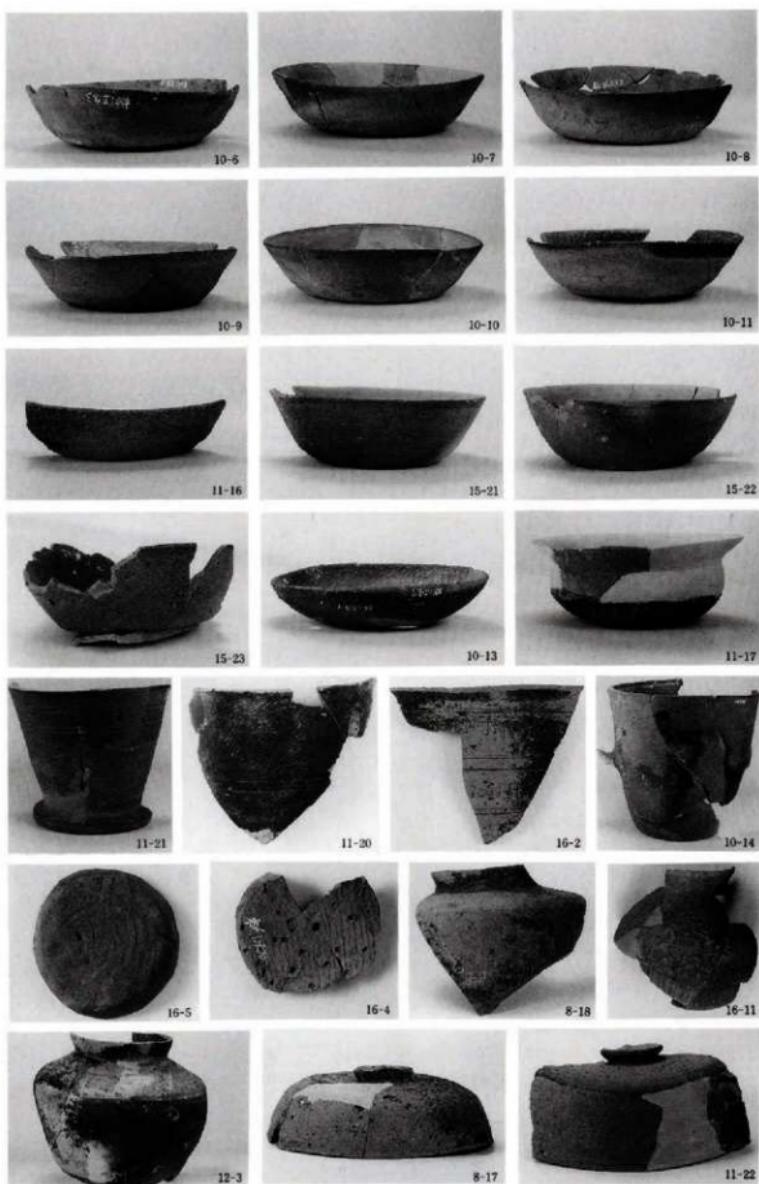
調査後遠景



考古地磁気測定資料採取風景









8-1



8-2



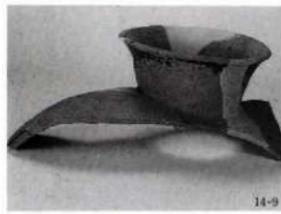
16-6



16-7



12-1



14-9



12-4



16-8



12-5



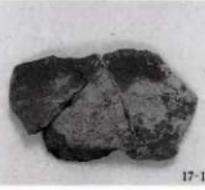
16-13



12-6



12-9



17-1



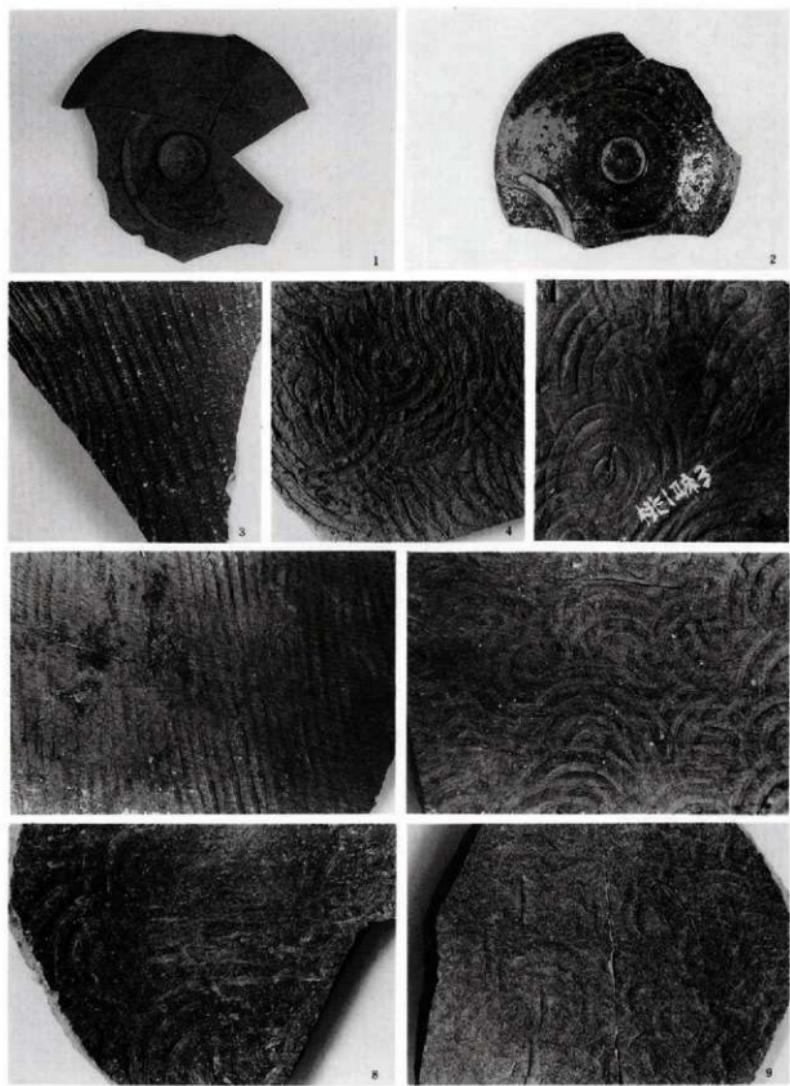
10-18



9-17



17-2



1・2は環唇の天井部に有白环の高台が溶着したもの。

1は縦1列に重ね焼きした、2は交互に重ね焼きした痕跡が残る。

3~9は裏側部叩き目文で、3は平行線文a類、4・5は同心円文a類、6は平行線文c類、7は同心円文b類、8は同心円文b類が同心円文と平行線文が融合したもの（D型類）に切られているもの。9はD型類である。

那谷桃の木山古窯跡
発掘調査報告書

平成 3 年 3 月 20 日 印刷
平成 3 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町91番地
〒923 電話0791(22)4111

印 刷 英 文 堂
